

373

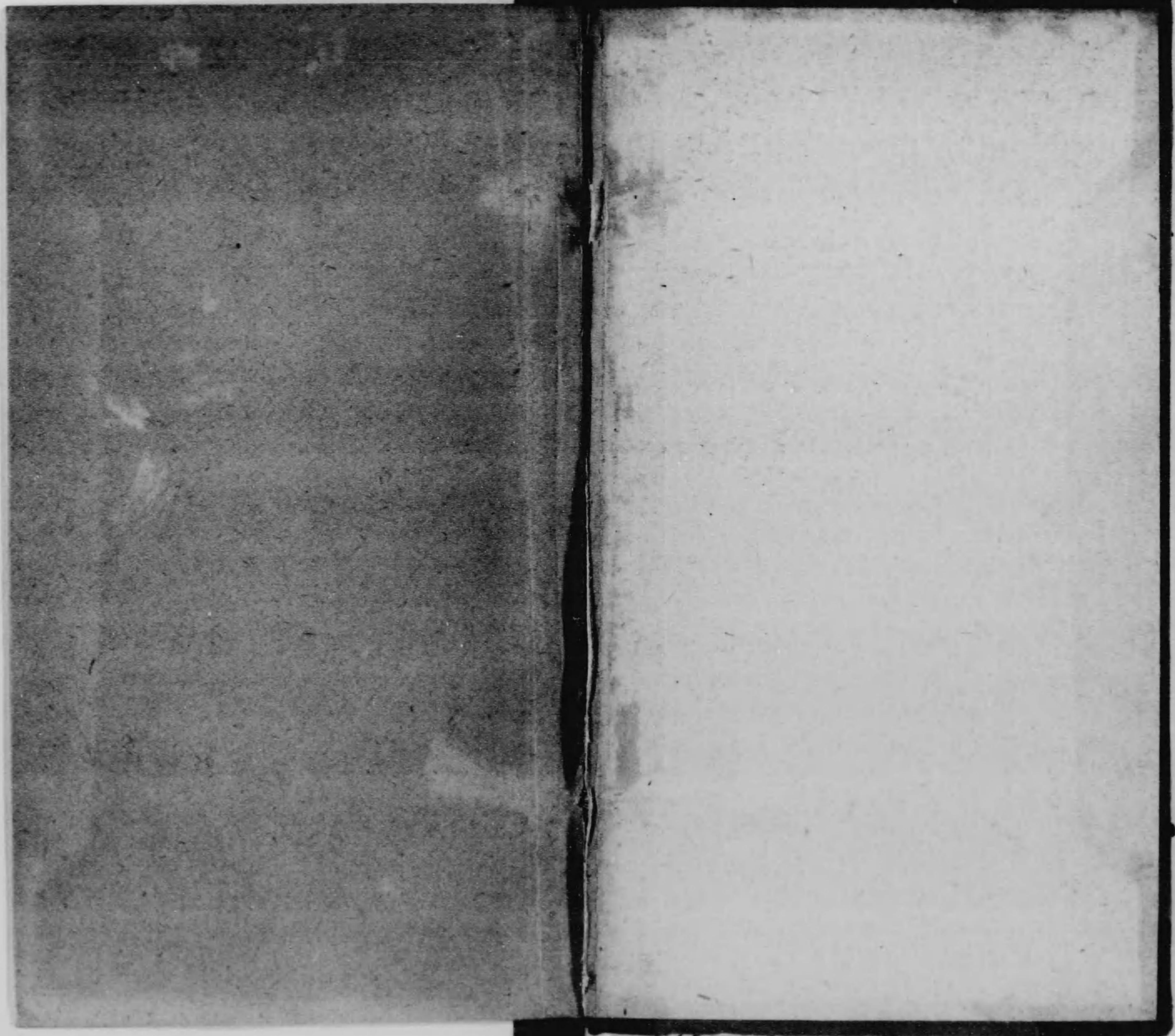
433

越中福野



始





新年
福



373-433



綿織物絹綿交織製造販賣

合同織物株式會社

富山縣福野町

(電話一一〇番)

大正
9. 2. 10
内交

北一醬油株式會社

登錄商標
富士太陽
マツホク
醬油釀造元

富山縣福野町

福野上町小賣部 (電話二三番)

福野浦町小賣部 (電話四八番)

金澤支店 (電話一四六五番)
金澤市石屋小路

電話一〇八番電報ホク又ホ
振替口座東京三六七五七番
金沢七七四番

米穀肥料商・倉庫業
運送業・精米業
織物委托販賣業



中央倉庫株式會社

福野驛前

電話 壹貳番
電話 貳四番

登 錄 商 標

ウメバチ屋

醇 良 清 酒

釀造
發賣

元

砂土居次郎平商店

富山縣東礪波郡野尻村
電話 福野一〇一番
振替口座大阪二六二八九番

織物製造販賣業
各國織物買繼業



福野織物株式會社

電話十三番電略(〇フク)又ハ(ヨ)
振替口座大阪壹五參九七番

土地建物賣買
金錢貸附
有價證券信託賣買



内外土地株式會社

本店 富山縣福野町 電話一六番
支店 金澤市十間町 電話二二八番
電話二二四番

砂糖澱粉其他製菓原料
有價證券信託 賣 買
金 錢 貸 附

ホ 株式會社北陸商會

本店 富山縣福野町 電話 二七番
支店 金澤市博勞町 電話 一八八一番

序

我が福野町は、夙に機業の旺盛なるを以て名を成したるも。幾年の頃よりか、——福野町は眠れる獅子なり——と云ひ傳へらる。此の譬喩は、案區に稀有なる四圍の古き森林の幽致なるに憧憬しての詩的辭か、或は又、富財を擁すること他の遠く及ぶところにあらざるも、餘りに活動の平板なるに慄らすしての擲喩か、其旨意孰れにせよ、一たび歐洲戦亂の大響音に耳聳て、獅子吼一番、奮迅の偉力を表示し、善く處して贏ち得たる異常の勢利を以て素地を作り、今や北陸に於ける商工業の中樞地として、京濱阪神の都市と呼應し、益々向上と廓大さを劃し、他方文化の事業亦將來の社會啓發に貢献する等、目覺めたる獅子は凡ゆる方面に向て全幅の能力を發揮したれば、單調他の奇無かりし我が町にも、進運の甚だ著き物を見るに至りたり。

茲に於て乎、一有志の手に、我が町の經歷を述べ、且つ地方風趣を叙したる案内様の物なかるべからずとて其録記を勤めらる。予は可なり煩瑣なる職務を掌理するのみならず、學力未だ達せず、才識なほ博からざる青衿の徒にして、斯の如きを能くすべき器にあらざりしも、偶々織物起原の詳悉を尋ねる旁々、自ら揣らす筆を執りて遂に業を卒ひ、題して越中福野となしたり。素より其一斑を蒐録せるに過ぎず、殊に恐らくは、自らの視聽を擇みたる記述と、前川喜左衛門先生の郷土史及び其他の史乘より摘載したるものとの詳畧同じからず、文體の異も亦免れず、而

して偏倚せし節ありて、勳獎者並に讀者の意想到はざるものあるは、寔に愧悚に堪へざる所なり。若し傳聞の訛と、魯魚の誤とあらば、博雅高明の士幸に之を正されむことを請ひ、他日の完成を期す。本書編纂に當り、補導と後援とを忝うしたる佐々木、安藤、前川三先生町長傍田氏に謹んで敬意を表し、尙資料を寄與せられたる諸氏並に予を勵まして作成せしめたる友人諸兄の厚意に對し深く感謝す。

大正七年十二月

編者しるす

目次

卷頭寫眞版

- 田中貴族院議員 山田衆議院議員 片岸前町長 傍田現町長 森田組合長 組合事務所 織物彰功碑
- 福野織物 織物陳列場 福野町役場 福野市街 神明宮 行燈 農學校 小學校 車中より見たる福野の森 福野の草市 福野の年の市

上編、町勢

總說

- 來歴 位置面積地勢 氣象 土地戸口 選舉有權者 諸稅

實業

- 概說 織物(沿革、組合、生産狀況等) 農事 清酒 醬油 名菓千代の梅 金融機關
- 水力電氣 會社

運輸交通

- 道路 鐵道 通信

教育 兵事	三二
教育	小學校 縣立農學校 青年會 日曜學校 圖書館 産業講習 婦女會 軍事 軍人會
警察 消防 衛生	三五
警察 消防 衛生	三五
神社 寺院	三六
神明宮(夜鷹祭)	西方寺 恩光寺等 信徒 婦人會
赤十字社員 愛國婦人會員	三九
追 補	三九
皇太子殿下行啓	草市 年の市 功勞者學者俳人等(阿曾三右衛門氏、崎良平氏、義仲寺彌山)
田中城趾	我町と新聞紙
遊 樂	五一
搦手より	劇場 玉突場
下 編	五一

附近人物名所史蹟

勤王烈士宮永良三	宮永家(利仁將軍、宮經次郎、宮永國員、正意、正運十二人兄弟、燕翁と宮永家)	安居寺	五三
高瀬神社	善徳寺 立野ヶ原 林道酒池鐵泉	繩ヶ池(木の葉石)	五箇山 大牧温泉 湯谷温泉
瑞泉寺(國寶の勸進狀)	黒髮庵塚 翁浪化上人	彌波嵐山 中田橋	弓清水 柘檀野 増山城趾
千光寺	淳良親王御墳墓——公卿塚
卷末地圖	(越中 彌波 福野市街)

目次終



氏年正田山員議院議衆



氏文清中田員議院族貴



福野織物同業組合事務所



福野織物同業組合長森田茂兵衛氏

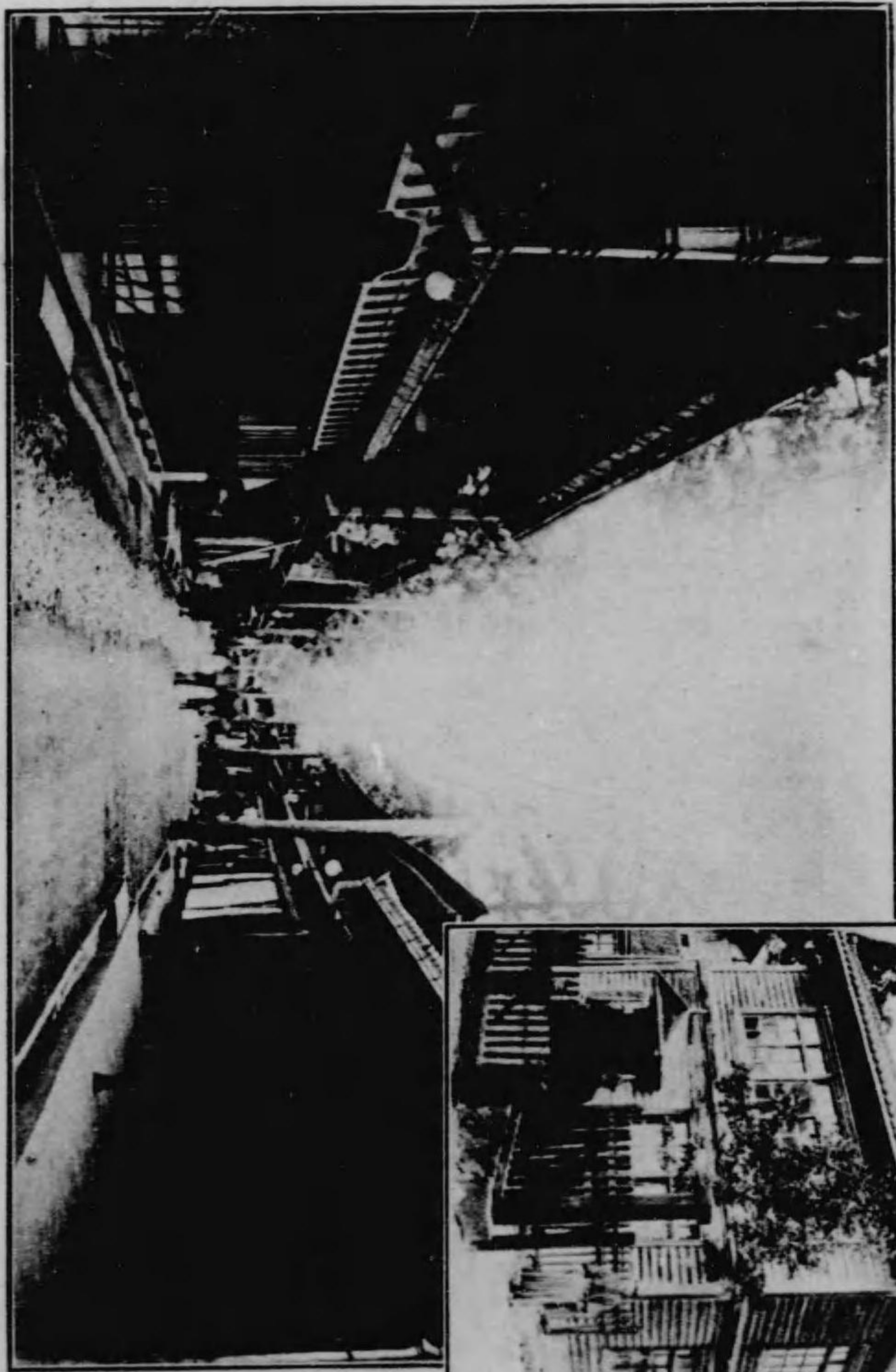


前福野町長片岸弘氏
前福野織物同業組合長

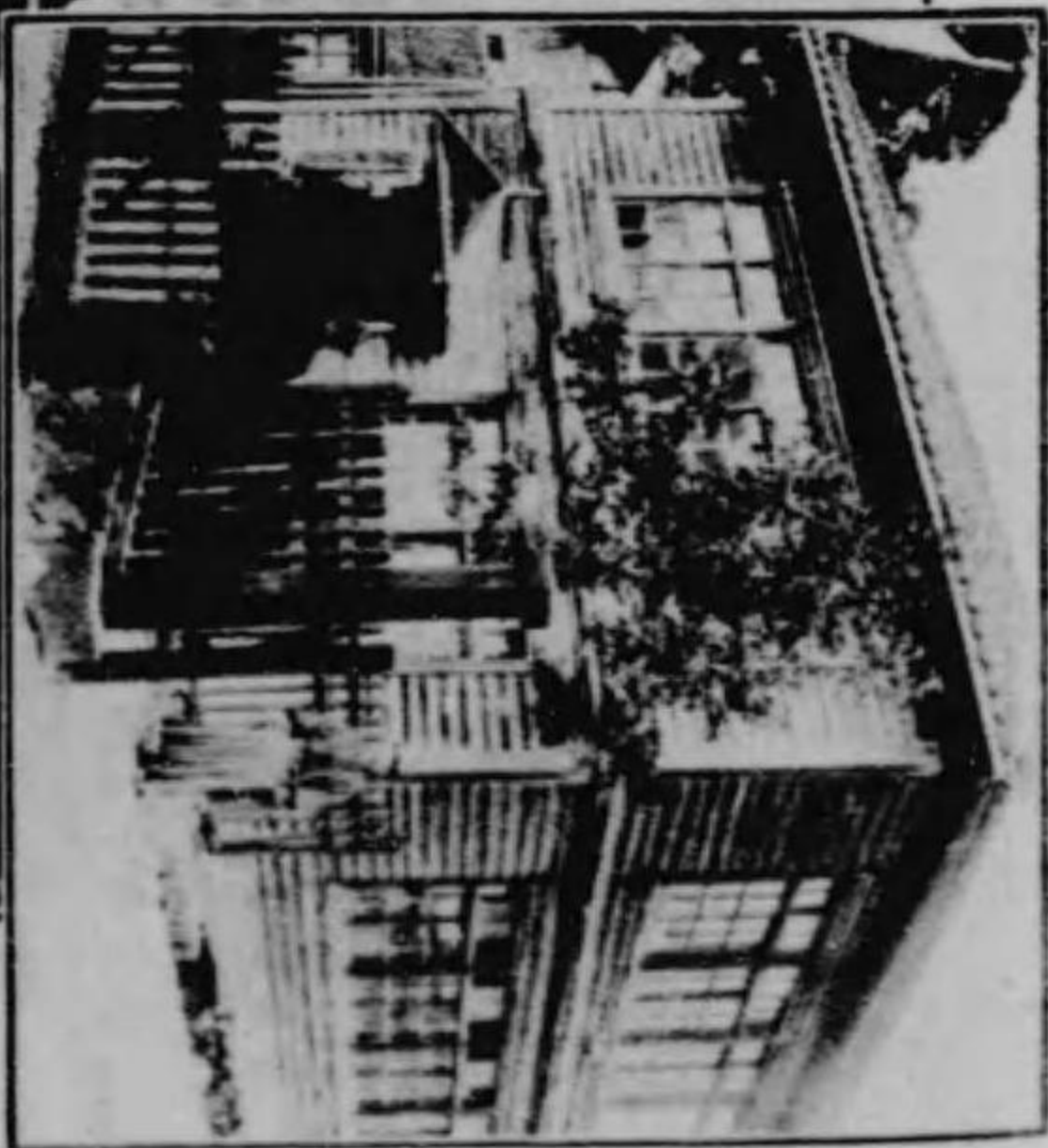


現町長田邊三郎氏

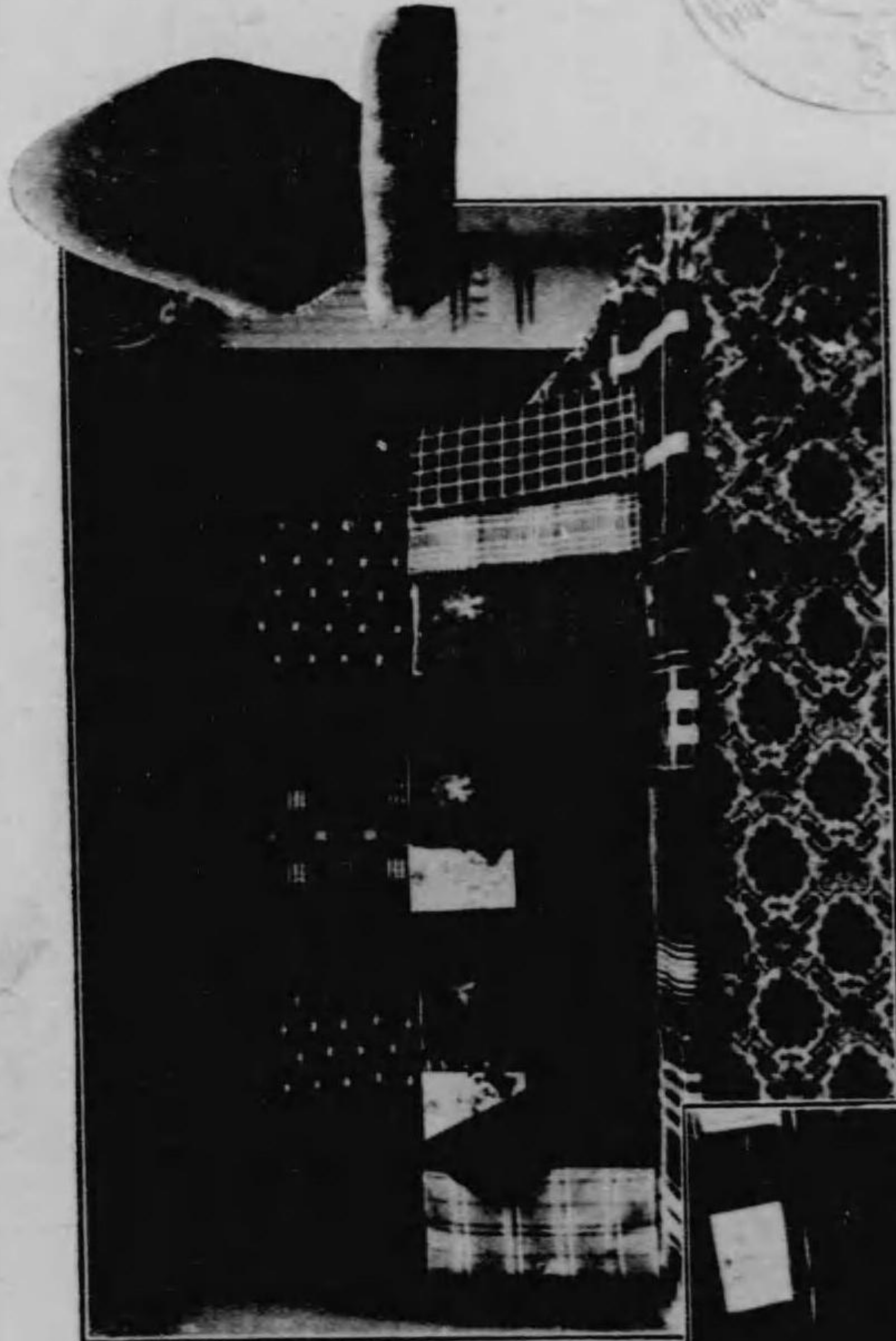
福野市街



福野町役場



福野織物影功碑



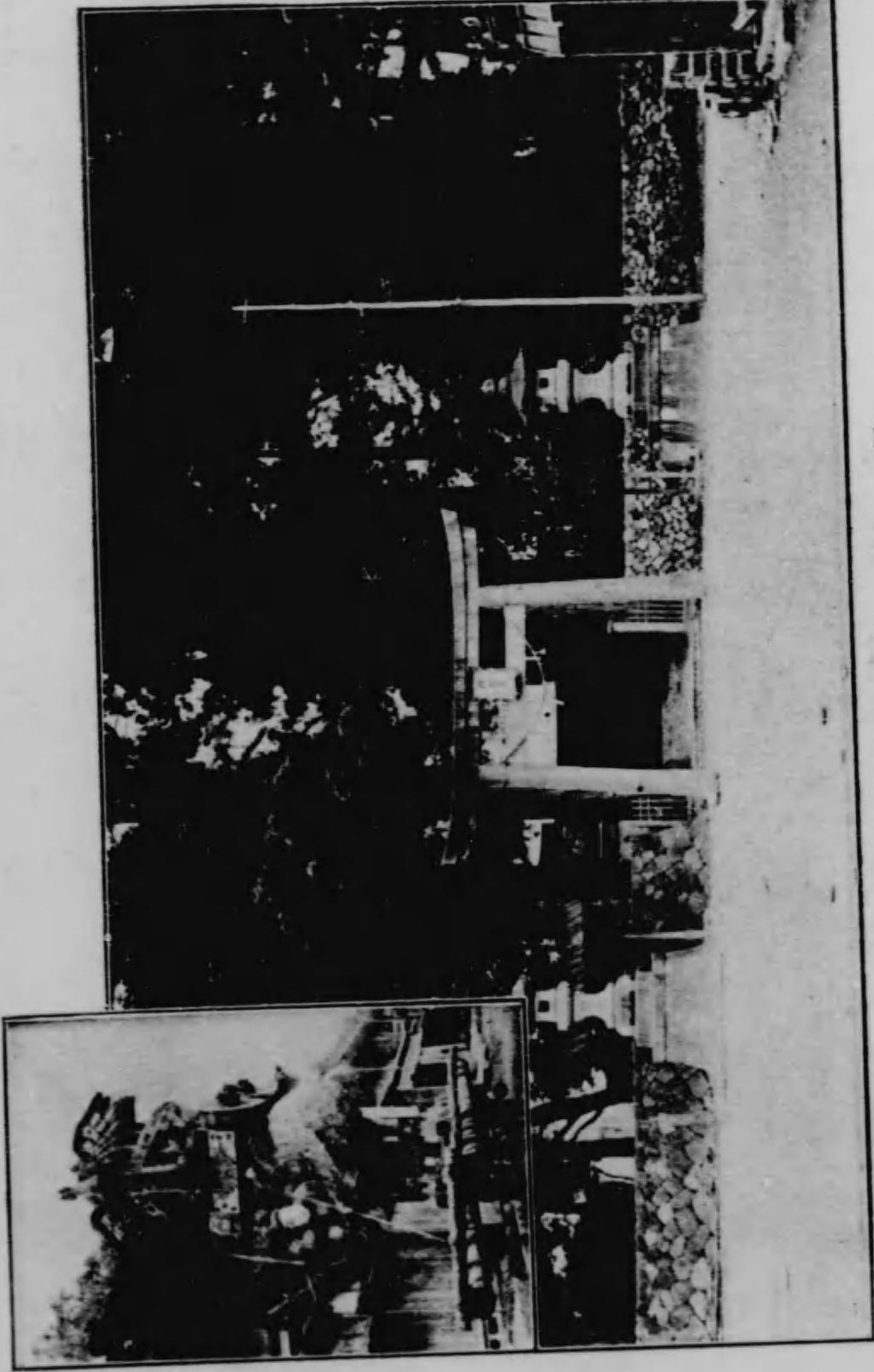
福野織物



福野織物列館

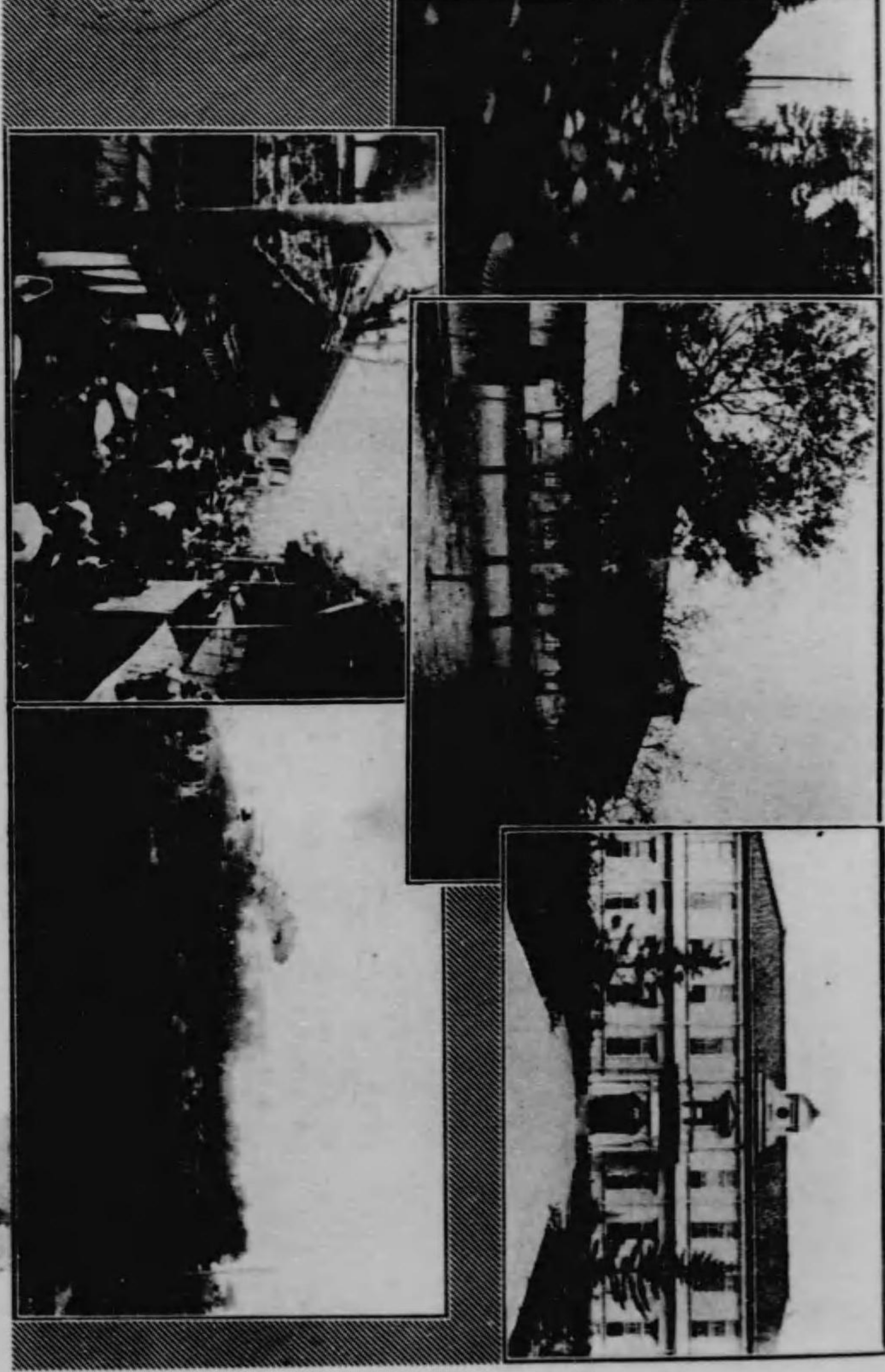


福野神明宮



燈行

福野小學校



福野町歳ノ市光景

福野朝市之光景

森の福野の見たる車中





上編 町勢

總說

來歴

〔古代〕 本町の古代に關しては、史料備はらず隨て概説し難しと雖も、有史以前に於て莊川汎濫し、其流域の經過して地層をなしたることは、地下數尺にして忽ち砂礫の堆層を見るに憑りて之を知るを得べく、而して其草昧の地たりしは、悠久の年代なるも、聯次以前は林野に沿ひたる荒蕪未開の僻陬にして、今尙鬱蒼たる古木の森林と、廣茫なる苗島原野（現農學校敷地）の殘存せるに徴しても瞭なるべし。

起源 慶長十年加賀藩に於て、地領に竿入を行ひ租税法を定め藩内收入の増額を圖らんと時々開墾を勧めたるが別して松雲公在世中大に農商の發展せんことを類と策したる機に臨み、有志者は豫め阿曾三右衛門と計り左の町立請願文を三右衛門名表を以て提出せり。

乍恐申上候、越中利波郡之内野尻野過分の所、先年よりの田島にも不相成、今に其分に御座候、（二字不明）諸方より少茂構無御座地に而御座候間新町御立被爲可被下候、左候へ者當年中に家數五六十間茂立可申候則居屋敷の儀は浦地へは廿五間宛申請候、地子米代銀并に當り物として町口六尺に付而銀子壹匁宛家立申次の年より指上可申候御事（中略）

市日の儀は近所之市日にかまへ不申二日七日に御極、月に六才の御市札頂載仕度御座候(中畧)
可然様に被爲仰上御印頂載仕度御座候間被爲仰付被下候はは難有仕合奉存候 以上

慶安二年六月十八日

本江村三右衛門判

國府新助様

斯の如く野尻郷内野尻野の地に就き町立を出願せしに翌三年一月許可を見るに至り、直に郡奉行國府新助之が改作指導の任に當り僅十六七月に過ぎざりしを、平夫傳馬等を聚め五十七月に致し、更に村落との物資交換を期し、月六齋二七の市日を相定め、之を開始せしが今日尙盛況を繼續しつゝある青草市の初めにして、是に由りて漸次繁盛を招致し隨つて戸數も六十四を數ふるに至れり。されば誓請に據り地子地奥行二十五間町口六尺に對し地子銀一匁(一坪に付四厘歩)を納付し得る迄に抄りたるも、翌五年出火ありて全町を烏有に歸するの慘狀に陥り、遂に藩の御城銀を借り入れ一時の救助を施すに至りぬ。然れども萬治二年即ち七年を経て御城銀を償却なし終りたるは洵に其間一意挽回に努めたるや必せり。而して戸口愈々繁殖せしかば兼れての素懐たりし御藏建の取計ひを願ひ遂に寛文元年御藏四棟を建立して毎年十一月に至り各村定額の地租米を茲に運搬致し、代官の嚴格なる質量の検査を経て倉納れを終るを例とせり。斯くして納入せし御藏米は十村役の監理に屬し馬下と稱し馬を以て津澤に運搬し、同地より川下輸送をなしたり。尙御藏には上納米の外に概を貯へ凶作の折には之を貸與した

り之曰ふ。(御藏番は代々小西嘉右衛門家勤む)

貞享元年には百二十余戸となりたるも、未だ産物として認むべきもの無く、唯家内に八講布を織るに過ぎざりしが偶々藩侯の命に依る幕用布地を調製せしに干繋して漸く職業的に進みたるものなるも、文政三年に至り寺島屋源四郎等の献身的盡力

に興りて多大の製産を見更に綿織物棧留綿の製造を見るに至り是に追從して各業興起し全く町構をなす迄に聚合し天保六年には四百余戸を數ふるに達せしかば其間には藩政時代に於ける國守の治績吏民の能否を檢する爲め幕府は將軍の代替り毎に之を諸國に派したるものなるが、本町にも是等巡道上使一行宿泊したれり。(是等上使は大抵目附より出て其復命に依り殆ど藩の運命を左右すべければ、藩は最も畏れたりと)

巡使に正副ありて左の七回の正使は田中方に泊し副使は其都度山田方福富方山中伊左衛門方等に分宿せり

田中方宿泊の上使

一、寶永七年寅六月六日 島田藤十郎 一、享保二年酉五月十日 島井權之丞

一、延享三年寅五月七日 大久保江七兵衛 一、寶歷五年亥五月 大河内善兵衛 一、寶歷十一年巳五月四日

依田金十郎 一、寛政元年酉五月朔日 筑紫從太郎 一、天保九年戊閏四月廿五日 木下内訛



中田邸之宅及門

山田方宿泊の上使

一、天保九年戊閏四月廿五日 石尾繼部

尙安政三年九月十三日には中納言齊泰公高岡より當地を經由し城端御泊の途次山田方に中休ありたりと

當時改作奉行は年々農耕を視察し、郡奉行は町民を寺社奉行は寺社を監し、其下に御扶持人十村役あり又犯罪に關しては改方ありて町村を監督したり。既に然れば本町は町治上の吏員として算用聞一名、町肝煎一名、町役人七八名組合頭若干名等あり、町肝煎(幕末には田中伊左衛門氏)は其役宅ありて役人は之を輔佐し組合頭は其指揮を受け



福許之邸

廢藩後明治四年七月新川縣治に置かれ、明治五年十二月磯波郡第三區五番組となりしより石川縣に(明治九年四月)合併後明治十六年富山縣に分縣してより是に屬し明治十七年官

となりて總務を執り。選戸長の制を見る迄山田七彦氏戸長を勤め制度更新の際福野村新屋敷村三日市村二日町村を關區となして山田正景氏戸長

福富方宿泊の上使

一、天保九年戊閏四月廿五日 寛新太郎

松原新各村の一部を福野、三日市、寺家、新屋敷の全村を以て本町を組織したるも、明治二十二年四月廿七日柴田屋、八塚の二村を除きて現今まで異狀無く統轄し來れり。

七十數年前まで茅萱繁茂し狐狸の棲息せる御藏町南側を始め、本福寺の以西即ち稻荷堂邊より新屋敷、田中宅趾邊に掛けての丘陵十羅は、杉樹森々萱草茫茫野獸の巢窟たりし荒野にして往々古びたる甲冑刀劍の類頭蓋骨を發見したりと謂ふ地と

現農學校地たる苗島ヶ原、其他所々に開拓當時の礫石を累積せし石丘ありたるも悉く敷地及耕地と化り、或は其料に供せられて明治十六七年頃には全く其跡を殘さざるに至りたり。



山田之門

〔現勢〕地名辭書にも福野は城端町、井波町、津澤町、出町、福光町の中心に位し梅鉢の紋を形成すと優美に譬ひてある如業の盛賑なること、取引、金融等の敏活なる機關ありて、供に歐洲大亂の經濟界に變動を起したる際能く機先を洞察して幾多の利益を獲得したるを以て堅實なる郷土の事業に意を注ぎしかば北陸地方經濟界の先驅指針として益々國力の擴充に貢献する所あらんとす。

現時貴族院議員に田中清文氏を、衆議院議員に山田正年氏を當町より出すに於て、社會上政治上如何に縣下の權威地たるかを、推知するに難からず。

位置、面積、地質等

福野町は磯波平野の中央（海拔二百六尺余）に位し、東は南野尻、西北は野尻、南西は廣塚の農村と境界す。而して其廣袤は東西八町南北十町にして面積凡そ九十町歩あり之を福野（上町、浦町、横町、新町、七ツ屋、東上町、辰巳町、御藏町）二日町、新屋敷、松原新、苗島、三日市に區劃し、平坦なる地勢と肥沃なる地質を有するは近傍農村と相同じ。

氣象

氣温の最高は七月にして華氏九十六度に昇り最低は一月若は二月にして三十度に降ることあり、降水の多きは冬季にして梅雨の候之に亞ぎ、降雪は大抵十月中旬にして四月上旬に終霜し、而して降雪は十二月下旬よりして三月中旬に及ぶを常とす。近年一夜に四、五尺の積雪したること屢々ありたり。

土地及戸口

區別	田	地	有	民	租	地	有	地	免	租	地	計	合	計
種別	田	地	畑	地	宅	地	其	他	計	道路並用水路	墓	地	計	計
反別	六三六、九〇五	一〇、六一三	一八一、七二〇	一一、〇六六	八三〇、四〇〇	一一、七一〇	五、九〇二	一七、六一二	八四八、〇一五					

種別	商	業	工	業	商	工	業	農	業	勞	力	其	他	計
戸數	一六五	一〇九	五二	一〇六	八六	二二八	六一九							
會社數	一〇	二	一	一	一	二								

種別	本	現	住	入	寄	留	人	口	本	本	籍	出	寄	留	人	口	計
男	一、五九九	一、五八六	六三	九三	一、六六三	一、五八九	三、三二二	三、三二二	一、五八九	一、五八九	二六九	二六九	二六九	三、七六二	三、七六二	三、七六二	三、七六二
女	一、五八六	一、五八六	六三	九三	一、六六三	一、五八九	三、三二二	三、三二二	一、五八九	一、五八九	二六九	二六九	二六九	三、七六二	三、七六二	三、七六二	三、七六二
計	三、一五五	三、一五五	一二六	一八六	三、三二二	三、一五五	六、六四四	六、六四四	三、一五五	三、一五五	五三八	五三八	五三八	七、五二四	七、五二四	七、五二四	七、五二四

議員及選舉有權者

貴族院	衆議院	縣	會	郡	會	町	會	附
議員	有權者	議員	有權者	議員	有權者	議員	有權者	貴族院議員
二	二	七二	一	一〇五	二	一〇五	一六	田中清文氏
								衆議院議員
								山田正年氏

諸稅

（大正六年度）

種別		納税額	
田租	一、三九、二〇〇	戸數割	一、五〇、四九〇
宅地租	九一四、四三〇	營業稅	六二八、一九〇
畑地租	八、八四〇	雜種稅	二、四八、〇〇〇
營業地租	二、四三〇	營業稅附加	六二七、九四〇
營業稅	五、〇八四、〇六〇	所得稅附加	六〇〇
所得稅	八、九四一、〇五〇	其他ノ附加稅	三三九、九五〇
織物消費稅	三六、四四一、〇三〇	其他ノ土地地租	二六八、三四〇
酒造稅	一八、四六六、九〇〇	其他ノ土地地租	九〇三、七〇〇
鹽油稅	二、一〇九、〇〇〇	合計	六、七八七、二五〇
合計	七三、六九八、一〇〇		

種別		納税額	
地價割	二三八、八七〇	國稅營業割	五八五、三三〇
國稅營業割	五八五、三三〇	所得稅割	七八八、一〇〇
戶別割	四、九七七、四四〇	縣稅營業稅割	一七四、〇三〇
同種稅割	六六四、七五〇	合計	七、四二八、五二〇

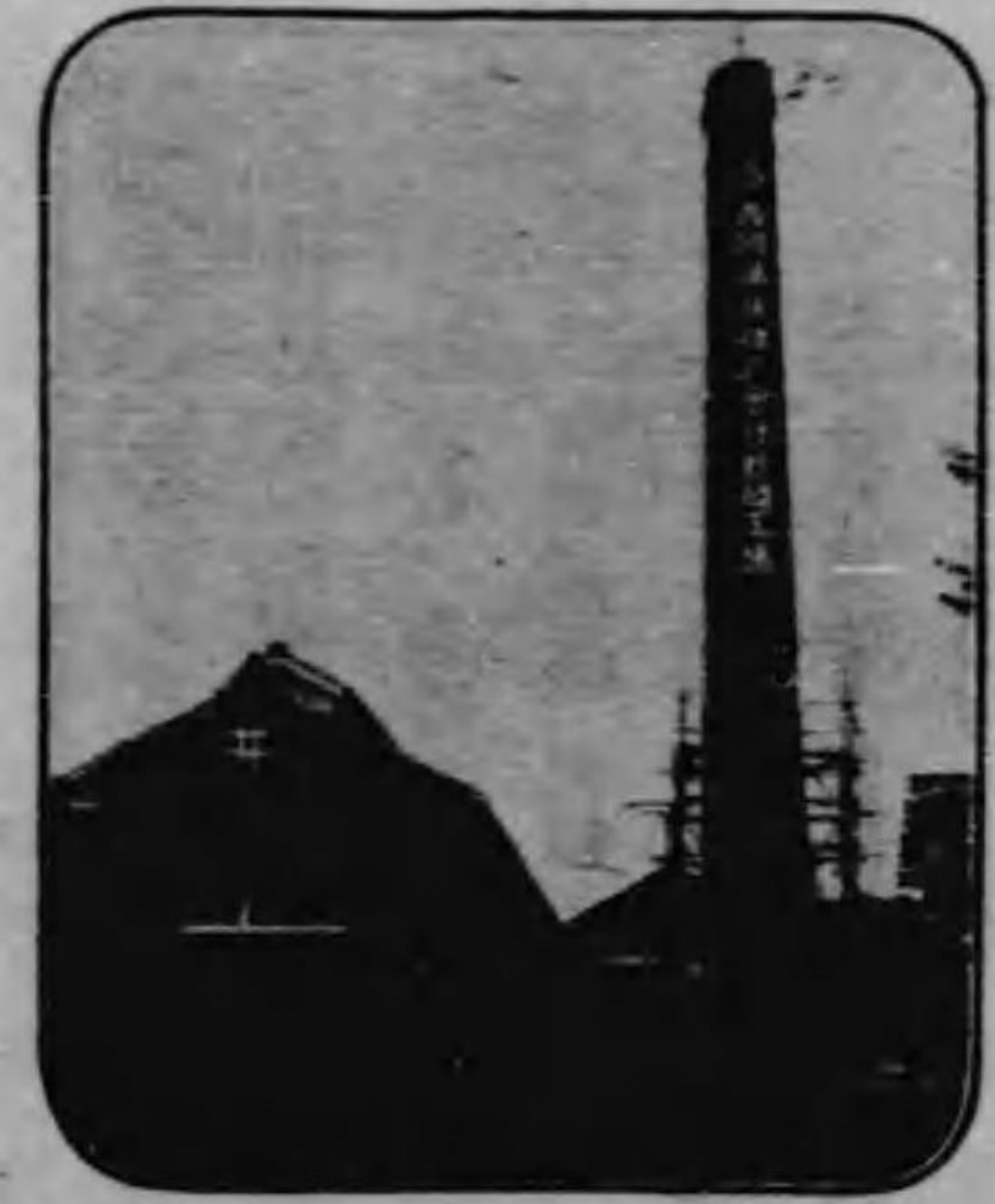
實業

〔概説〕 産業中綿織物は貳百數十萬圓を、米穀は收穫高僅々五萬數千圓に過ぎざるも當地を経て輸出する其價格は百數十萬圓にして、二萬數千石の集散を見、清酒の拾七萬五千圓に次ぎ醬油の拾四萬圓、此等に隨伴否より以上の生産額を擧げんとするものに、製材、製鐵、紡績の新事業を入れざるべからず。されば各種の商業機關勃興するありて多大の補助を寄與しつゝ、あれば、近き將來に於て必ず實現さるべき幾多の新事業は、相提携して新時代の機運を追ひ、伸屈活躍大工業地、大商業地として、到底他地方の追従を許さざるべき所以は、資力の充實せると、交通の利便を擁すればなり。

織物

本邦織物の起源

我國神代の古より機織の業の存せしは記紀に乘る素尊逆刺の荒事を以て神衣の寄服殿を織されたる文に憑りても知るを得べく、而して當時樹皮草根の纖維を績みて袴を織り、其柔密なるを和袴、粗剛なるを粗袴と稱し、苧布、志奈布、葛布、麻布、木綿布とに種別して其雪白なるを以て最上となし、復草木の汁を絞搾し、或は色彩ある粘土の類を以て摺染したりとも傳ふ。又更に纏綿して倭文布と曰ひ、倭文シヅメ部と新渡來の工藝者と相伍して漸次發達を遂げたるものなるべし。



(壹其)場工社會式株絲綿同共

神樂館命によりて大成せられ其品質の精巧に伴れ需用漸く多となり之が紡織に従事する人も數を加へ、諸地方に於ても其供給潤澤となるに至りて、朝廷に於ても此の人を聚めて一部の部曲となし、名付けて倭文布部と云ひ、垂仁天皇には五十瓊敷命を以て其部曲の統率者となし、皇室の直轄に屬せしめ以て技工奨励保護し給ひ遂に韓土との交渉頻繁となるに至りて數多の工藝技人歸化していつれもこの部曲民に編入せられ技能愈々進み本邦固有の品

秦韓人(辰韓)太秦公宿禰の男功滿王は仲哀帝八年に、同融通王は應神帝十四年に百二十七縣民を俱に販化したれば之等に蠶を養ひ絹を織らせしに其技甚だ巧妙なりしを以て秦民に姓を波陀と賜り(因て秦をかく訓ませたれども實は機の義なるべし)又二十年に倭漢直ノ祖、阿知使主、都加使主十七縣の黨類を率へて來朝し綾織を傳へしかば之に漢氏を賜へたり。其後帝の仰により阿知等は高麗に渡り吳に達する便を求め、久禮波、久禮志二人の導者に依りて吳に渡り、工女兄媛、弟媛、吳織、穴織の四女を吳王より與へられ、販途筑紫にて胸形大神の乞に因り兄媛を奉り、工女を率めて津國武庫に及ぶべき應神帝の崩御に逢ひたれば、これを大鷦鷯尊(仁德帝)に献したり、是より絹織物は麻布の上に秀で専ら貴人の衣裳に供せられたり。允恭帝の御宇、諸國の製絹を調買と定め、新に織部司を設けて製絹の業を勵ましめ給ひ、雄略帝は益々蠶織を興さんご、吳衣縫、蚊屋衣縫兄弟を漢飛鳥兩衣縫部に置き、猶后妃に蠶桑を奨め螺贏(多臣)に命じて蠶見を聚めしめ給ふを謹め給ひて其殷盛を期せられたり。(因みに木綿の弘く傳播せしは此時代にて延暦十八年崑崙人の參河に漂着したるもの其



(貳其)場工社會式株絲綿同共

種子を携へたりしを以て之を紀伊淡路阿波讃岐伊豫土佐及び太宰府等にて播殖を劃りたるも多くは綿として眞綿代用に供し、其紡績したるや否や詳ならじ

越中の州土は大己貴命國造し給ひてより、崇神帝の御宇に大毘古命を派遣され、成務帝の御代には市入命大河音足尼を國造として、天平年中は大伴家持、茨田王等國司として統治久しき其間に於て、養蠶製糸及び製織業の兼營的に奨勵し居らざるこそなげんも何等確證の徴すべきものなく唯是を打ち續く泰平に、羅綾の袖紅錦の衣を纏ひし奈良朝時代、若くは他府縣の事情等を綜合して考知すべきか。麻布の如きも西瀛波郡北鹽谷村八講村本觀寺由來記に載する「延暦十三年(千百余年前)日本に八ヶ所法華八講の靈場御建立に候當寺は其一ヶ所に御座候(中畧)八講執行の砌地布入用に付農婦共に爲織申候是八講布と申始にて候」とありて兎に角住民中絹綿麻等を製織なしたるや推則するに難からざるべし。

越中織物の來歴



(參其)場工社會式株絲綿同共

然るに戰國爭亂の世に遷り越中に於ても名越島山桃井足利神保上杉佐々の諸士相闘争し一篇の哀史を貽して世は秀吉の收攬するところとなり、さしも永年に互りて蹂躪されたる越中の州土の廢頽したる業務も漸次挽回し、天和より寶曆明和年間に

掛け小川絹、絹縮綿木綿、絁等を諸國より傳へたる機に於て、藩侯も養蠶を督勵し木綿を培養し其他凡る施設幫助をなしたり。されど文政年間迄には差したる發展を視ざりしも、献身的に活動したる人士のありたるは時勢の要求とに仍り著しき進歩發達は縣下の重要物産として米穀に亞ぐ。其織物中越中綿を以て福野綿は大半を占め我が織物界に名ありて、其の起原の主要な推知すべく之を古老の記憶若くは口碑文書に據りたり。

福野織物の沿革

抑々福野町開市以來未だ特産として認むべきもの無く、織に家内に入講布を織るに過ぎざりしを、偶藩侯の命に依る幕用布地の製造が機因となり、逐次地方的産業の形態をなすの域に進捗したる如し。

然るに未だ汎く需用者の供給を充たす能はざりしを、寛政六年頃寺島屋源四郎氏之が改良をなさんと越後に赴き、縮布の*の生産を企圖し、江州能登川彦留より職工を聘して开が普及に盡せしかば技大に熟し越後江州の製品をも凌駕し金澤を始め京阪の地へ販出するに至りたれば時々彼地商人來り之を購ひ越後江州産の名を附せしに徴しても其の熟達と熾盛の一斑を窺知するに足る。爾く麻織物は隆盛を來したるも氏は見る所ありてか文政三年美濃岐阜より職工若干名を雇備し、綿織物菅大臣

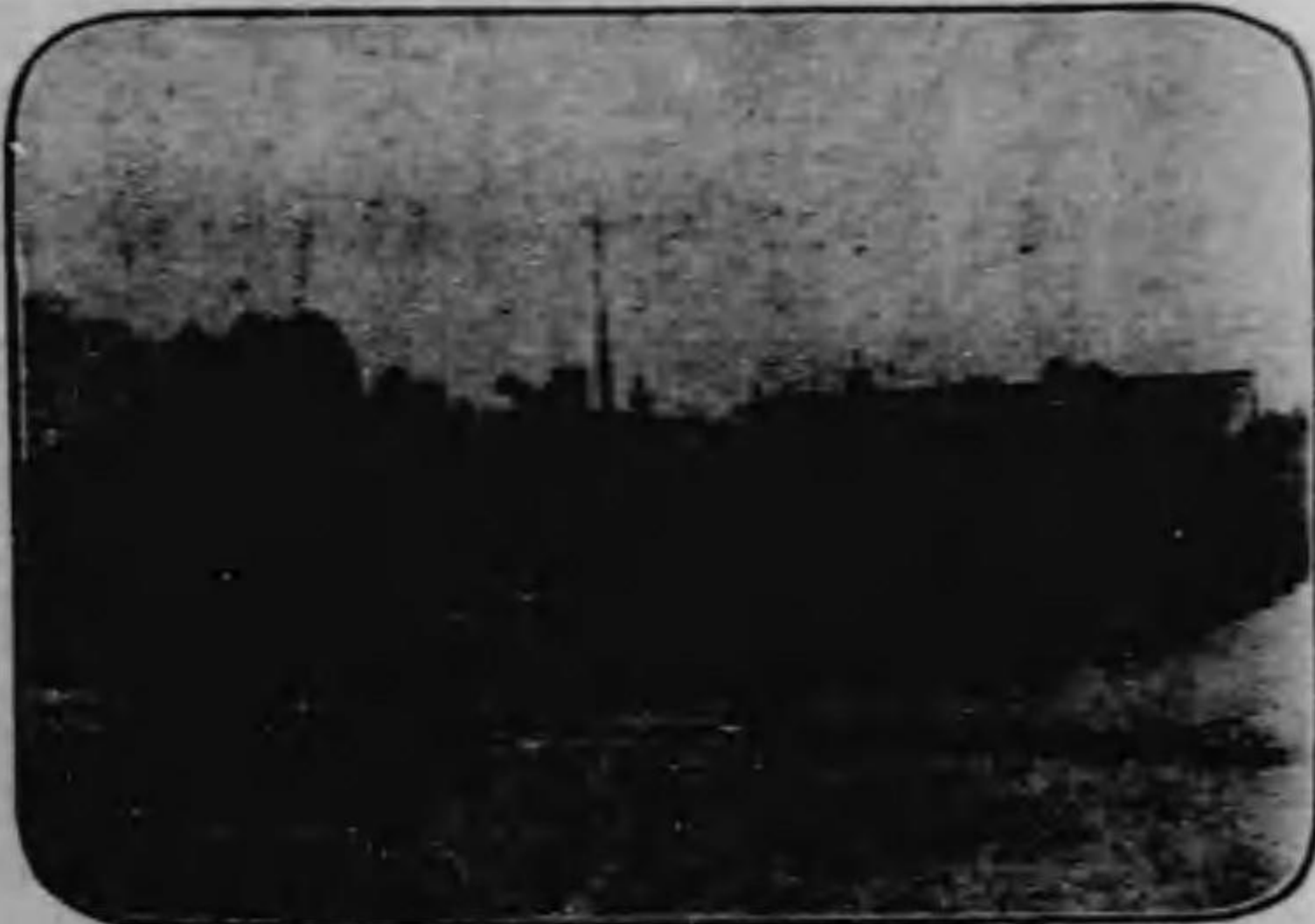


共同綿絲株式會社本社

*製織を攻究し職工を伴ひ歸りて、一般に其組織を教へ製織の傳播に努めたり。爾して寺島氏は更に縮布の改良耕

縮(別名棧留縮)の製産を圖りて之を奨勵し、遂に福野菅大臣縮の名の下に廣く需要を喚起するに至りて、現時産業の基礎を此に起割したるなり。

實に寺島氏は新業の先驅者にして、指導の勞を厭はず辛酸苦闘大に努め、地方物産を興起なしたる功は永久之を彰せざるべからざるなり。而して此の間陰に畫策後援したる氏の權那西方寺乘鳳師の兄



中越織物株式會社工場(觀外)

(隱居)、産業的形態を成してより金銀を貸與したる藩侯、其の手續の煩を敢したる十村河邊氏にも興りて大なるものあり。菅大臣縮は地方にて紡ぎたる綿絲を六百八十より七百までの箆に算し、長機具にて盛に製織



中越織物株式會社工場(部内)

に力めたるも時勢に伴ひ幾多の變遷を経、明治十八九年頃より三二を四ツ入になしたる地綿、或は四二の燃糸を経とし平物を緯となしたる双子綿、或は節糸を使用し、或は諸玉織を試むる等其規範は孰れも綿織物を中心として發展し來りたる爲め、麻織物は漸次減退し明

治二十四五年頃には殆ど其跡を絶ち今は僅に蚊蠅地に名残を止むるに過ぎず。

明治十八年金澤興産社技師足利の人、峰岸庄吉氏吉井氏の招聘に應じて來り、技工甚だ幼稚なりし當時の染織法糊附法に改善を促し、生産能率の増進を期する等、畢生盡瘁したる功勞夥しきせず、地方人は氏を以て中興者と仰ぐも宜なり。舊來糊附には米糊及生熟糊を職工一人一日の加工量僅に一丸に過ぎざりしを、優に六丸の量を仕上げ、菅大臣編の如き製織しつ、布海苔を一送り毎箆前に刷けしを以後斯る手数の要無く易々として従業せり。尙懸附の如きも槌打を使ひ然も之を高岡工人に托して漸く辨じ得たるを氏に由りて當地に始て機械製附を据置したり。

明治二十五年足利の人岡嘉之を聘し、同二十六年黒川技師に染織法を傳習したるに由り、双子類紡績類絹綿交織物に亞ぎ三十二年海氣類等の製産を見るに至りて全く北陸に於ける綿織物主産地として汎く知らるるに至りたり。

明治三十年未曾有の浮塵子發生し、次いで經濟界變動を齎したる爲我が綿織物界にも一大蹉跌を來し終に當業者の絹織物業に轉するの止む無きに至らしめたり。されど三十七八年の股役に會し人心の緊張は實用的なる綿織物の需用を喚起し、再び爰に舊に復したるも消費税の課税は尠少な



越中織物株式會社染工場

らざる痛痒をなす所なりき。

原絲は文久の頃石動、放生津、富山及び岩瀨産を使用し、明治四年に至り英吉利絲天竺絲の二十手を経絲に、越前丸岡産上別(八手)無類(十手)を緯絲に用ひたり。同七年頃に洋絲三十二手を四ツ入とし、十算の箆に通じて、印度産二十手を緯絲に用ひ、又中國三丹州絲を使ひ、十四年頃に堺及び三軒屋紡績の移入を見、爲に丸岡絲三丹州絲は驅逐されたり。十六年頃に尼ヶ崎紡績來り、十九年頃四十二手の双絲移入してより、三十二年の單絲等を使用して漸次時勢の展開に従いて細、太、中番幾種を供給し得る迄に進みたり。是等原絲は金澤高岡名古屋大阪の各問屋より購求したるも、大正三年當地に其便を得て、各地の移入は減退を來したり。(明治二十



福野織物株式會社本社

二三年頃福野織物株式會社の設立ありて原料の取扱をなしたるも同二十六年解散したり。染料を菅大臣編時代に於て地方産の藍を以て紺を染め、下地として紅樹皮(丹殼)を用ひ、茶には蒟安、山漆、鐵漿を、鼠には藍を施して

の低廉、工程の簡易なりしに感はされ、先を競ひて之を使用したる爲遂に變色褪色の憂慮を惹起し、染色の堅牢を以て聲價を



社本社會式株產物陸北

揚げ一つの誇となしあたる織物も茲に失墜、販出縮少如何とも爲し難き悲境に陥りたり。爰に於て同業者一般の覺醒を促し信用の挽回を期すべく、嘗て十四年頃製織組合なる下に尺巾の検査を施行したるに鑑み、染料の精選、織方の改善尺巾の一定を期せんと明治三十六年町長片岸友吉氏(後ち弘)同業有志を糾合して説く所あり茲に織物同業組合を組織し先づ製品検査の實施に着手し、尙諸般の機關を設置して只管製品の改良統一を劃りたる爲め福野織物の面目頓々に揚り世上の需用を喚起するに至りたり。

明治四十年來よりの經濟界の動搖は斯界に於ても



場工社會式材物織同合

淺からざる創痍を享けたるにも拘らず四十二年度に六十三萬三千八百八十反といふ當地方として嘗て見ざる増額を示したるは販路の擴張したるにも據るべけれど概して其以前に於ける好況に乗じて製産したる過剰品の見越賣したるや其後の生産状態の漸減し

たるに徴して瞭なるべし。尤も當時は新に製造業を開始したる者は多く廢業し、舊來よりの當業者は手控のみに止まりて他産地の如き慘狀を聞かずして経過したり。大正三年に至り組合に於て純良染料を撰定し組合員に共同購入を勧め染色の一定を企て既に二回に及びし時歐洲戦亂の余波は染料、藥品等の激騰を傳へ、當地方當業者に把りて其得失輕からず一時は成行に委し居たるも、他産地ご其營業情態を異にし、多くは製造卸賣兼營にして斯る時局に於て製造縮少の自由を許し、餘裕ある資金を以て染料の充當に買きて製造品の價値を保維持したるは先きに組合より奨めたる共同購入が導火となりたるものにて、其後益々奔騰したるを台覽に供せしに六點御買上の光榮を賜りたり。



(親外)社會式株物織同合

染料藥品は當地方に於て豫期せざる幸福を齎し延て大正六年に於ける原絲の大暴騰に遭遇したるも協同投資其他組織を擴大にしたる一般業者は良く商況の機先を制して取引の圓滑を圖り新に獲收したる資を以て他日の反動期に處すべく事業組織の改造をなし確乎たる歩調にて營業の擴充を企劃し世界新運と相伴ひて進むに至りたり。

織物の光榮

明治四十二年九月 聖上陛下は東宮に在しませし折北陸行啓の際福野町南野尻より織物を謹製して献上したるに御嘉納あらせられ尙本縣假物産陳列場に於て地方織物

福野織物同業組合の來歴

明治十四年製織組合なる下に規約を制定して織物の粗製濫造の防遏に力めたりと雖も、何等法規の保護機關なかりし爲め事業執行に支障生じ四五年にして解散したり。然れば其間三十五年頃まで粗製濫造、染色不良に流れしかば遂に世上の排する所となり、販路爲に他産地の領するに至りて販出を阻まる、悲境に會したり。此機に當り町長片岸友吉(後弘と改む)氏大に斡旋して當業者の覺醒を促したるご當業有志の奮起とに依り明治三十六年九月廿六日重要物産同業組合法に基き福野織物同業組合の設立認可を發起人森田茂兵衛氏他五名より申請し、翌年二月廿六日迄の認可を得て組長に片岸氏副組長に森田氏を推して製品の改善、販路の擴張等凡る必要なる諸般の施設及び調査をなし、専ら營業上の弊害を矯正し其利益を圖る目的を以て本領となしたり。

然るに當時恰も日露戦役の際會し經濟界の萎縮せらるゝに、販路*を擧げたり) 鈔からざる苦痛を嘗めしが各々屢勉奮勵して克く内顧の憂なからしむべく努力せり。爾く同業者の緊張せる期に於て染料の精選織方の改善尺巾の一定製品検査等の施設執行上に反つて何等の支障も醸さず着々進捗して失墜したり



吉一井次商店

*の蹉跌、加之非常特別消費税の義務を負ひ、(課税せらるゝや組合内に蔵置場なるものを設け官民の便宜を計りよく納税の實果

し信用も一段の映を以て復活し販路益々擴張さるゝに至りたり。

本組合員數は製造兼卸賣業者五十四名、仲買業者二名、卸賣業者五名、原料販賣者一名、加工業者一名計六十三名にして組長は設立當時より四十四年迄八ヶ年間片岸弘(舊友吉)氏勤續し、氏辭任後四十五年南部兵次郎氏就任したるも大正二年二月辭職し、其後副組長にて一切の業務を握掌し得たるも大正五年十二月森田茂兵衛氏就任したり。

販路及取引状況

販路は縣下一圓、石川、福井、滋賀、岐阜、秋田、北海道、樺太及び東京、大阪にして近時朝鮮、支那、南洋方面にも取引あり。而して取引状況は市場の設置なきと、問屋等の如き取引機關なきとにて自家製品及び委託品は直接得意先に出荷し、二ヶ月乃至三ヶ月の延取引なるも土地にては現金取引なり。

原絲の需給

原絲の需要は單絲に於て12 13 14 15 16 20の太番手及び24 30 32の中番手大部分を占め40の如き細番手之に次ぎ刃絲に於て42手のもの多く使用したりしも近時60 80手の瓦斯細物漸次使用の増加を見るに至れり。

「シルケット」「リンネット」等の特種の絲は尾州方面より、單絲双絲瓦斯絲は大部當地の間屋よりの供給なるもなほ高岡大



吉一井次商店工場

販より之を仰ぐものもあり。

生産状態

従來出機賃織にして其大半農家の副業にて五、六、九、十の繁忙期に於て就業せざれば依頼者は手を拱いて織上げを待たざるべからざりしを近年工場組織に推移せる爲め開が傍觀の苦を免れたり。

組合員の多くは製造卸賣業者にして染色、施糊、整經皆自ら爲して製織に着手する者最も多しと雖も亦經緯りを賃織者に托するもありて、原料及製品の受渡は凡て量目を以て之をなす。

製織及び染色の概要

製織上經絲の密度は幅何本と云ひて之を表示し、七百本より千本に至る原絲は1330 32手の單絲大部を占め42手の双絲之れに亞ぎ而して絲の細大に應じて箆に粗密あり、所謂福野織物は12手を經に供し13手を緯絲に用ぬ經絲數七百本1620手を經緯とし經絲數九百本、双子織は42手の双絲若くは2430手の單絲を經上し3032手の單絲を緯絲となし經絲數千本、白織は42手の双絲若くは2430手の單絲を經とし303240手の單絲を緯に經絲數千本、海氣は2830手の單絲を經に上げ3240手の單絲を緯系とし經



高橋一商店

緯數千本、瓦斯織には6080手を經となし同番手の他3040などの單絲を緯絲となして製織し其經絲數は千本より千四百本までなり。

染色は藍下を施し之に硫化染料を上掛けしたるものと、全然硫化染料のみにて染上げ華を添へん爲め「インドインブリカ」の如き鹽基性染料を以て僅に上掛けをなすものを大部となし、緋には纈緋と摺込緋とありて摺込緋には「ヤチナス」染料或は「アリザリン」染料を應用す。

織物生産高

年次	品名	双子類	紡績類	雜類	麻類	合計
明治八年		一三三、一五七反	八三、八〇〇反	四〇、八七三反	六、〇〇〇反	八九、八〇〇反
同 卅九年		一五〇、五二〇反	二七〇、八八元	三三、一〇七元	七、〇五一元	五三、九七九元
同 四十年		一五二、〇四七	三〇八、七〇〇	五二、七四八	四、八三三	四四八、七〇〇
同 四十一年		一六九、九一六	三三六、三六六	四二、三三七	四、四九四	四三九、八六七
同 四十二年		一九五、四〇三	三三三、二八一	六六、五七二	一一、四一九	五六四、二四三
同 四十三年		二〇四、三九〇	三三三、二八一	四八、六九二	一一、四一九	五二二、三三六
同 四十二年		二四九、二六八	三三三、二八一	六三、二七五	一一、四一九	六三三、一八〇
同 四十三年		二七、九三三	二八八、二二二	五八、九三三	一八、一四〇	四九三、二〇六
同 四十三年		一五三、五八	二五二、〇三七	三三、四七七	一六、三三六	四五五、三三八

同 七 年	同 六 年	同 五 年	同 四 年	同 三 年	同 二 年	大 正 元 年	同 四 十 四 年
一五九,四七五 一五,三七二	一八三,三二五 二九,九七八	一六八,〇八四 二〇,七〇五	一四四,〇五五 一三五,七八	一一二,〇四三 一三六,四六二	三九,三〇〇 五二,九六〇	三四,七八七 八三,四八九	一五,四九三 六五,三九六
三三八,六九八 三〇四,八三〇	三三六,八一 二九四,一七三	二八四,九八六 三二七,七三四	三四九,三九一 二七九,九二六	三〇一,二八七 三〇七,〇七七	二五〇,一四二 三〇〇,一七〇	三五〇,七八 六三,二九二	三八三,九四八 七六九,九四二
五一,三五六 三八,五九	七六,九一八 六〇,四六一	四三,二五〇 三三,七三五	三四,〇九九 三三,一五四	三三,八六六 二九,三三七	二〇,〇七三 二〇,七六五	一六,六四七 二六,六五五	一八,〇九一 三八,八〇一
一六,五八八 一四,九三〇	一四,五三三 一二,七九八	一六,八四〇 一五,九九六	一五,五七八 一四,七七七	一九,六二八 二〇,六二〇	二〇,九七〇 二七,六八三	一三,九一三 三二,〇八八	二二,〇二六 三七,四四四
五六,六一七 五四九,六五八	六一,五八七 五八七,四一〇	五二,一六〇 五二,一七〇	五四三,七八四 四五三,六四五	四六八,八二四 四九三,四八六	三三三,四一五 四〇一,五七八	四二六,〇六五 七七二,五〇四	四四三,七五八 九一,五八三
原 動 機	馬 力	電 氣	合 計	手 織	足 踏	雜 機	津 田
原 動 機	馬 力	電 氣	合 計	手 織	足 踏	雜 機	津 田

工場一覽

工場主	工場所在地	男	女	計	開始年月	豊田	鈴政	鈴道	津田	雜	足踏	手織	合計	原動機	馬力	電氣
越中織物株式會社	福野東上町	四〇	一三〇	一七〇	大正五年二月	大	八	八	二				大	一六九	一〇	三〇

共同織物株式會社	同 二日町	七五	二六七	三四二	同 八年三月								大	二七六	同	一三五
福野織物株式會社	同 横町	八	三八	四六	同 七年四月	大	五	八					大	一四四	同	三五
北陸物産株式會社	同 同	二〇	六七	八七	同 二月	大	二〇	六					大	一四四	同	三五
合同織物株式會社	同 七ツ屋町	一〇	九三	一〇三	同 一月	大	八						大	一〇〇	同	二二
共立織物株式會社	野 尻村	五	一三	一七	同 六年					二〇			二〇	二〇	同	三
吉井 一次	福野浦町	四	九	一三	同 六年二月								一六	一六	同	二
花島文三郎	同 同	三	五	八	同 八年二月					大			大	八	同	三
河邊 久藏	東野尻苗加	三	六	九	同 二年								一〇	一〇	水	三
新山久太郎	福野七ツ屋町	一	三	三	明治三十年七月								三	三		
柴田幸太郎	同 横町	二	二	三	大正五年								一〇	一〇		
梶井興四郎	同 同	二	二	三	同 七年								九	九		
内山徳太郎	同 同	三	二	一	同 六年								一〇	一〇		

淺井由太郎	福野新町	一	二六	二七	大正四年														
中村庄太郎	同新町	三	二	二四	明治四十二年														
北越織物株式會社	野尻高儀	二	三三	二四	大正八年														
合計		一八三	七四四	九二六		大二三〇	二二〇	一二二	一〇五	大三六六	大八	三〇	七九	八三	兼六一八	大三二〇			二二八

因みに賃織者は明治四十三四年頃は九千名を數へ、東礪波、西礪波、婦負、射水の四郡の外石川縣河北郡にも亘りてゐたるも現今工場組織を見るに至りて漸次減じたり。なほ天保十五年に當町に有したりし機具は百二十九臺にすぎざりき。

農 事

農産として先づ米穀の壹千四百五拾石此價五萬參千四百六圓にして壹段歩の收穫高貳石五斗の割合に當れり。尙此他四千圓余の農産を出す。

米穀肥料倉庫等の業を開き、旁ら精米業を經營して縣外市場と殷盛なる取引をなす。

因みに當地に於て製造する唐箕、千石従は柴垣勝太郎、内山松太郎、内山藤九郎三家累代の業にして數々改良補設をなし使用上最も便益を與ふ。又犁に改良晚田式犁ありて實用新案第四三二七六號の登録を受く、該犁は晚田次吉の發明にして其構造甚だ簡易堅牢輕快にして且つ深耕の目的にも適應し能く實果を擧ぐといふ。

米、雜穀、肥料、精米業

有價證券委託賣買



福野商事株式會社

出張所

野尻村

柴田屋

電話 四六番
略 〇シヨ

電話 七三番



株式
會社

兩礪銀行

福野町 電話三番

清酒、醬油、名菓

〔清酒〕 本町山田正年氏の詩百篇、二日町福富潤之助氏の日本魂、野尻砂土居次郎平氏の梅鉢正宗等の芳醇は三千石を精製し近時縣内縣外各地よりの需要頻繁なるも充分に供給し能はざる盛況なり。

山田酒造場は延享、寛延年代藩命に依りて之を津澤町に一箇所福野町に二箇所を設置して經營に當りたるも文化年間に至り先づ津澤町醸造場を他家へ譲り次で福野二箇所を各分家に與へて一旦斯業との關係を絶ちたるも明治二十五年再び分家より一箇所を預り大正四年他の一箇所をも併合經營して今日に至りたり。現今醸造する石数は昔時の其れよりも遙に凌駕し銘酒詩百篇は巖に店主御即位大典に參列したる光榮を永劫記念し久遠に慶福を追憶せんが爲商標大典正宗となしたる別醸と共に名聲四方に高揚して年を逐ふて隆昌を極むるに至りぬ。茲に於て工場の一だ改築と諸般の整備を要するに方り模範工場たらしめんとの抱負を有して着々計劃の實行を早めつゝあれば、完成後の卓越せる活躍こそ期して待つべきなり。砂土居醸造場は息蓋氏の操業に依りて頓に能力の盛大を齎し山田氏と相對峙して技術の進歩せると規模の宏壯なるは全く地方に於ける斯界の双壁たり。

福富酒造場は技術上に改良を加へ敢て前二者に譲らざる獨特の芳醇に矜誇を示しつゝ、あるは洵に驚異に値す。

〔醬油〕 北一醬油株式會社の富士太陽苗崎長一郎氏の末廣北越農産株式會社の北日本等は年額三千五百石を醸造して北陸に於て斯界の覇を爭ひたるも近年更に東京北海道等へ盛に輸出す。

北一醬油株式會社の前身、合資會社安永商會は遠く安政二年の創業に係り、由來歲月を閱して當代安永六之丞氏の繼承する所となりて陋習に囚はれたる斯界の舊弊を遺憾となし自ら之が改革を圖るに學說に考へ家傳に參して周匝なる研究を以てしなほ更に各産地を屢々歴訪して大に顧慮盡瘁したる勞空しからず漸次向上進展著しく遂に縣下に於て一頭地を抽んで瀧波主要物産の一に數へらるゝに至りたり。されば各地共進會品評會等に於て受賞したる其數枚擧に遠あらざるも殆ど開

催毎に審査員に推選され其好機を捉へ多年の研究乃至考察を發表して斯界の改展の資料に供せり。

大正七年十一月地方有志の幹旋に依り同業福富平一郎氏と併合し猶有力の士を網羅して、より以上規模を廣大にして北一醬油株式會社の設立を見るに至り、専ら原料を精選し熟達せる技術は滋養美味を按配し徳用をも念となして最新の諸器械を設備し能力の増殖を圖り以て各地の需用に應じ最も堅實にして清新なる營業振を發揮しつゝあり。

北越農産株式會社苗崎長一郎氏の兩者も亦新進の技能に或は累年の熟練に據りて整然たる操業振を示し着々事業の擴張を企圖しつゝあり。

〔名物千代の梅〕 往昔よりの名菓にして現今は朝山精華堂森田風光堂等の調製に係り、石動の薄氷、井波の御所落雁と俱に、瀧波に於ける最も高雅にして風味よき名物とし汎く珍重せらる。

金融機關

本町には金貨業と銀行業との二種ありて、金貨業は三四の素封家之を替み銀行業の率先をなしたるものは明治六七年頃に設立したる博有社なりしが當時商業家として概ね法律に熟せず、且つ組織上にも不備の点多く爲に竟に解散を見、其後身として第十三銀行の創立したるも、又復損耗を招致して移轉し去りたり。

如上銀行業は沈淪して殆ど之を唱道企劃するものなかりしは、地方一帯財源裕にして格別不便を感じざりしに因由する所なりしも、時勢は單に斯る範圍に止まるを許さず幾多商工の振起を促進して歇まざるものありて、茲に金融疏通の機關たる銀行業開設の必要起り、先づ城端瀧波銀行斯の要求に應ずべく明治二十九年一月出張し、翌三十年中越鐵道の開通を見各地との接觸、輸出入の頻繁となり、産業の進歩發展を促すは必至の趨勢にして愈々緊切重要となりたれば、三十二年末株式會社兩瀧銀行興り、三十六年株式會社田中貯金銀行に續いて四十二年株式會社田中銀行の設立ありて、地方實業界の圓滑を圖りたるも大正四年其業務を出町中越銀行に譲渡するや中越銀行直に支店を設置して繼承し、田中銀行は一時休業状態となりたれば大正五年野村銀行大正五年神澤銀行各々支店を出し、長く勉勵したるも大正七年一月野村銀行瀧波銀行に併合せし爲廢止するに至れり、同年末本町有力者集りて田中銀行及田中貯金銀行の開放を乞ひ、株式會社北陸商業銀行及株式會社北陸貯金銀行と改稱し本町有力者を糾合網羅して、營業の開始を見るに至り、皆與に確實を旨とし地方産業の伸展を補助する所蓋し大なり。

電氣

初め瀧野電燈株式會社として經營し繩ヶ池の水源を利用したる瀧波電氣會社の分力を受けしも就中より小矢部川水に依り發電する石動電氣會社より供給を仰ぎ近時幾多の事業勃興して猶不足を告げければ中越瓦斯株式會社と併合し中越電氣株式會

社と改稱し基礎鞏固となりたる期に於て別途福光附近鎗ヶ先の地に發電所を設置して補充する等中々地方工業の爲め多大の便益を寄與しつゝあり。

福野町に於ける主なる會社

社名	營業科目	資本金	創立若クハ開設年月	社長、頭取、取締	支配人、支店長
共同綿絲株式會社	綿絲製造販賣	二,〇〇〇,〇〇〇 ^円	大正三、二、二四	柴田 東作	
越中織物株式會社	織物製造販賣	一,〇〇〇,〇〇〇	同 五、二、一一	森田 茂兵衛	
合同織物株式會社	織物製造販賣	三三〇,〇〇〇	同 八、九、一五	有川 新之助	
北陸物産株式會社	同	一〇〇,〇〇〇	同 七、二、二三	内山 仙藏	
福野織物株式會社	同	五〇,〇〇〇	同 七、六、一九	吉井 銀七	吉井 諦
北越織物株式會社	同	一〇〇,〇〇〇	同 八、一、二三	河合 吉郎	
株式會社六合商會	同	一三〇,〇〇〇	同 八、二	中坪 幸一郎	
共立織物株式會社	織物	七五,〇〇〇	同 六	西能 源西郎	
福野製布株式會社	同	六〇,〇〇〇	同 七、二、一一	林 梅次郎	

中央倉庫株式會社	運輸、倉庫、米肥、織物	三〇〇,〇〇〇 ^円	大正六、一〇、一	有川 恒通	長谷川 太平
株式會社北陸商業銀行	銀行	五〇〇,〇〇〇	同 七、二、二	同	前川 恒二
株式會社北陸貯金銀行	同	三〇,〇〇〇	同	同	同
株式會社兩礪 銀行	同	一,五〇〇,〇〇〇	明治三、二、二	山田 正年	河合 吉郎
株式會社中越銀行支店	同	五,〇〇〇,〇〇〇	大正 四、二、三	岡本 八平	葛 勝太郎
株式會社磯波銀行支店	同	一,二五〇,〇〇〇	明治元、一	荒木 文平	森井 三木太郎
株式會社神澤銀行支店	同	六〇〇,〇〇〇	大正五	神澤 新右衛門	百生 正俊
北一醬油株式會社	醬油、味噌	二五〇,〇〇〇	同 七、二、一	安永 六之丞	
株式會社中越鐵工所	機械、器具	五〇,〇〇〇	同 一〇、二、八	島山 小兵衛	
福野木材株式會社	木材、建築、受買	五〇,〇〇〇	同 六、三、六	林 芳太郎	
内外土地株式會社	土地、建物、信託	一〇〇,〇〇〇	同 六、八、三〇	林 梅次郎	
大丸商事株式會社	倉庫、米肥信託	一〇〇,〇〇〇	同 五、三、二一	林 芳太郎	

株式會社北陸商會	信、貸附、製菓原料	100,000 ^円	同 七、八、七	西能源四郎
中越物産株式會社	米、食料、委託	100,000	同 七、二、五	林善吉
福野商事株式會社	米、肥、雜穀	50,000	同 八、二、八	山田源治
北越農産株式會社	醬油、味噌、豆腐等	15,000	同 六、九、七	福富卯一郎
中越電氣株式會社	電力	150,000	明治四、三、二	西能源四郎
清涼水株式會社	飲料製造	10,000	同 六、一〇、五	高田與市

運輸交通

〔道路〕

磯波の中樞にあれば物資の集散上自然優秀の地位を占め四通八達す

福野より出町に到り(一里十四丁)出町より戸出(一里十九丁)を経て高岡に達す(一里三十四丁)

福野七ツ屋口より廣安、田尻、吉江、田中の各村を経て福光に通す(一里二十四丁)又廣安村より山田川に沿ひて城端に入る(二里十六丁)

同く七ツ屋口より福光往來に別れ稍東西指して城端往來あり(約二里半)

横町より二日町に出で本江村を経て津澤町に到り(一里九丁余)石動に達す(約二里半)

横町西端より一直線に柴田屋を経て小矢部川橋を渡り西磯波郡川崎村に出で安居村にて石動福光間の道路に會す(約二〇丁)

御藏町及辰巳町より出づるもの相會して高畑より苑高屋に出で井波出町間の道路と合し別途に據り種田村を経て青島に至る(約一里十丁)

御藏町端より百丁村を経て木材にて有名なる庄川沿岸金屋に通す(一里二十丁)

新町より苗島に出て焼野、高瀬、坪野を経て井波に入る(一里廿四丁)

其他の道路略す

〔鐵道〕

中越線、加越線本町に交又をなし、中越線は城端より起り高岡に北陸線と會し更に伏木港を経て氷見に到り、加越線は青島町に起り本町及び津澤を経て石動町にて北陸線に便するなり。

〔通信〕

明治六年七月郵便局を設置通常郵便業務のみを取扱ひたるか明治十八年十月貯金、同二十三年八月爲替、明治二十五年三月内外電信、同二十九年七月小包郵便、同四十二年九月電話通話交換業務の取扱を開始せり。明治廿五年三月電信を明治四十二年九月電話の取扱開始を見たり。本町に於ける通常郵便物引受数は最近一ヶ年約三五〇、〇〇〇通、配達八〇、〇〇〇通、小包郵便物は引受五、一〇〇個配達四、五九〇個、電報は發信七、四〇一通、着信八、八〇〇通。電話は一加入區域内五〇〇、八〇〇度加入區域外二〇、四〇〇度を算す

教育、兵事

〔教育〕 本地の町立となるや交通の便と共に戸口滋息し隨て町内に寺子屋生じ町内及近郷の子弟を教育したり。明治五年の學制は我國文運の革新にして、寺子屋の制は志あるもののみ始めて教育を受け得るも、學制は然らず戸に不學の徒なく邑に無學の民なからしむるの趣旨に出たるものなれば國民の欣幸に堪えざる所なりき。

〔小學校〕 福野尋常高等小學校は福野町の東端字御藏町に在りて舊加賀藩廩倉の跡に在り明治六年三月三十一日の創立にして本町有志崎良平山田雄作桂井他八郎小西純三山田一穂五氏の盡力に係る初め福野村第一番小學と稱せしが明治七年三月遷喬小學校と改稱し同年四月新川縣教員講習所分場を置かれ附屬小學校に充られたり同八年九月文部省視學西村茂樹巡視同九年四月廢縣と共に廢せらる同十六年十二月三日文部省より一等獎勵品を下賜せらる同二十年四月一日小學校令に依り尋常高等となり同二十年十一月一日文部大臣森有禮閣下臨校同二十一年四月一日郡立高等小學校設置に依り高等科を廢し同二十五年四月改正小學校令實施に依り同年九月九日より遷喬尋常小學校と稱し同二十八年四月一日福野尋常小學校を改稱し同四十年十二月校舍新築落成(現南舎)同四十一年三月組合立福野高等小學校廢止に依り高等科を併置し組合立高等小學校々舎(現北舎)を充用し改正小學校令に依り尋常科六學年高等科三學年を置く同四十一年九月二十一日 明治天皇昭憲皇太后兩陛下御影拜戴大正三年十二月一日司法大臣尾崎行雄閣下臨

校同四年十月廿七日 今上陛下の御影を奉戴し同五年十月廿六日 皇后陛下の御影を奉戴す。
現在敷地總坪數千六十八坪にして校舍二棟外附屬建物共總計六百四十坪收容兒童高等科五學級貳百五名尋常科十二學級五百六十五名職員十九名なり。



縣立農學校及島巖碑

〔縣立農學校〕 本校は、明治二十七年十月二十九日の創設に係り當町の東端にあり、學校に於ける、農業の研究改良は、直に縣内農家の儀表となり猶産業諸種の疑義を質す等、農家との密接なる關係を有す。
本校設立に際し、高木太八郎氏、島巖氏の奔走企畫與て大なり。殊に島氏は不幸病に冒さるるや、遺言して資産の大部を設立費に提供して歿せり。明治四十二年其碑を校前に建つ。

〔青年會〕 福野町青年會は公共事業を援助し、風紀の改善、智識の向上、體力の増進を期し、夜學會、講演會、運動會を開催し雜誌を發行す。

〔日曜學校〕 福野佛教日曜學校と曰ひ西方寺佐々木慶成師の經營にして本派本願寺御大典記念事業として獎勵せる其數年以前より毎日曜兒童を精舎に集め讚佛歌、讚佛偈を教へ「面白いお話」爲になるお話」をして百名近くの兒童を喜ば

さしむ。

〔圖書館〕 佛教圖書館授眼藏と稱し西方寺境内に建設して、凡ゆる書籍を藏す。

〔産業講習〕 織物同業組合は時々染織の短期講習を開きて技能の普及を計り亦講演會を催して斯業の振展に努む。

東礪波郡農會は本町を中心とする近村農家を招集して農事の改良に努力す。

〔婦人會〕 婦女會ありて婦人としての處世の道を修養すべく時々講習、講話會を開く。

〔軍事〕 徴兵令實施以來本町より村山彌太郎氏徴收されたるは明治七年四月なり。當時名古屋鎮臺金澤分營第七聯隊に入隊し明治九年近衛第一聯隊に轉じ十年西南の役に參加して十三年除隊せり。氏を以て軍隊生活を経ひたる當町の嚆矢となす日清日露の兩戰役に



授眼藏佛教圖書館

於て始終齊しく外に驕らず内に倦まざる鞏固の意志を以て屢勉し、即ち國債の募集あるや喜び應じ、猶勝利の祝典や、戦死者追弔、遺族慰藉、應召軍人家族救済、凱旋兵の歡迎、戦捷祝賀等國民として誠を盡したり。

〔帝國在郷軍人會〕 福野町分會は明治四十一年發會式を擧げ、毎年春秋(紀元節大長節)總會を開き或は假想充員召集令狀を發する等全く風儀の矯正を圖り軍紀の振肅に勉むる所多し。

警察、消防、衛生

〔警察〕 明治九年五月石川縣示達を以て第五警察出張所設置するに至りてより屢々改革ありたるも現今は警部補派出所なり。其管内區域は福野、南野尻、廣城、野尻の一町三村なり。

〔消防〕 往古の火消方の事歴は詳細ならざるも道具として梯子、又、掛矢、鳶口、龍吐水、附屬旗、提灯を設備したるは今より八十年前後にして纏を調製したるは明治初年なりき、而して其頃總員五十二名の中頭分四名居て之を指揮せり。

明治十年農民一揆を町端に警戒して暴徒を防ぎ且つ「福野の消防命知らず」の諺の如く諸所の大火に出で應援活動なしたるも就中明治四年福光新町大火、十二年井波瑞泉寺火焰、三十一年井波大火、三十三年出町の大火は最たるものなりと。

現今は蒸汽唧筒壹臺腕力唧筒四臺ありて人員 名なり。

〔衛生〕 明治十二年八月始めて衛生委員なるものを各區に置いて流行病の豫防及消毒に従事したり而して明治三十三年衛

生組合を設置して之を 區に分け各區に正副組長を置き凡て衛生上の事を掌らしむ。明治二十七年五月より流行病の害毒を防がん爲に春秋二季大掃除を執行し、隔離病舎を明治三十一年新設し、亦町醫を置きて町内衛生事項を掌らしむ。

本町には醫師四名、藥種商五名、産婆二名を數ふ。

神社、寺院

〔神明社〕 當町に在り伊勢神宮の御分靈を奉祀すと傳ふ。社殿素雅にして回廊を繞らし。境内の老杉鬱蒼として幽邃閑靜自ら崇敬の念を生ぜしむ。

例祭を春秋に執行し、其春季祭たる五月三日には神輿の巡御あり、又山車を曳きて其彫刻、古美術を誇らし屋臺に囃子を奏する等甚だ古雅趣味掬すべきもの多し。

此他、稻荷社、天満宮、秋葉社等在り。

〔行燈〕 夜鷹ともいひ、一名俄とも稱し春季祭五月一日二日の兩夜、此の數十臺の大紅燈に火を點じて各町の壯者之を昇して勇壯、快活なる節調にて俚謡を唄ひて全町を練廻す。數年前迄は大奉書十八枚大に武者繪の摩訶羅を描き田樂に貼りその上方兩面に釣りを吊るし更に頂に出しを表す釣り出しとも竹を以て骨組を作り人物、花鳥、城廓等を模して紙を貼り蠟にて

線刻、模様を畫きて彩色を施したるものなり。其丈十數間に及びしを近年に至り、電柱等の爲め丈六間田樂六枚貼りに制限されたり。しかく短縮されたりと雖も此技巧壯觀勇氣風爽たる春夜の儘を觀んとて十數里の地より來る者雲集し爲に中越、磯波の兩鐵道は特に夜行列車を運轉す。

追分の街よ眞田帯

の巾ある街よササ

ドッコイサノサヨ

イヤサ

今年世が良うて穂

に穂が稔るヨ外は

いらいでサ、莢で

量る(拍子同し)

五條の橋から牛若辨慶蹴合ひ跳合ひサマ辨慶負けたサ、ドッコイサノサヨイヤサ

數十あれども略す。

〔信徒〕 町民大方眞宗にして、曹洞宗、浄土宗は僅に過ぎざれば眞宗寺院年中布教の法座を絶さず。



新町行燈

瀬田の唐橋唐銅擬寶珠ヨ水片影さすサ、膳所の城(拍子同し)

大和心よ様の花よ元の使を切りし時宗……

一升樽ヒヨッコロヒヨッコと昇いて急がにやなるま

い盃待つとるそんじや(そなた)オチヤヤレ〜お

ちヤヤレオチヤヤレオチヤヤレオチヤヤレオチヤヤ

レオチヤヤレオチヤヤレオチヤヤレオチヤヤレ〜

(おちヤヤレは押しやれの變りたるものならん)

ドッコイサノサヨイヤサ

〔寺院〕 町立以后當地に移りたるものにて眞宗本派三ヶ寺同大谷派二ヶ寺曹洞宗一ヶ寺と庵室、淨土宗の庵室となり。
〔西方寺〕 院庭老樹古木の間櫻樹多く花時の風趣殊に宜し。眞宗本願寺派にして寺域千六十二坪檀徒五百余を有し、應安元年近江源氏佐々木氏の某存覺師に皈依し法名を慶西と賜り、四代善如上人の時寺號及本尊を受け越中に下向す。初め吉江村に一字を創設し爾來轉々或は城ヶ鼻に或は八塚に、而して天和二年更に現地に移れり、現任職まで第廿二世なりと。

爰に特筆すべきは、本町機業との關係にして、實に壇徒寺島氏は先々代乗鳳師の兄隱居某の指揮畫策により斯業を開發展進せしものにて、而して隱居が裏面に於ける放資萬端を考ふるべきは氏また機織興業に嘉惠せしこと夥からずと曰ふべきなり。

因みに同寺は地方宗教界の權威にして、現住慶成師の如きは夙に宗教文化に見る所ありて、佛教主義の通俗圖書館建設の運びに至れり。地方實業の



西方寺

川寺) 月桂和尚の開基にして、金剛山恩光寺と稱し、代々勤修寺殿にて色衣勅許の御繪旨を受く。最初増山城主神保瓦術氏の建立にて神保家の菩提所となり檜檀野増山に在りて堂宇壯麗を極めしが、天正年中兵燹に罹りて悉く烏有に歸し、後年石黒

氏の施主にて雄神村庄金剛寺に轉じ、慶長三年時の城主中川光重の皈依厚かりしも寶永十五年一國一城の制令に據り増山城廢城に伴ひ漸次衰頹したるを以て慶安三年現地に移りたり。現住を以て第廿六世となす。因みに同寺は阿曾三右衛門春雄氏の菩提所なり。

此の他大谷派西源寺は寺域千坪門徒百六十を有し現住に及びて十三世、本願寺派本福寺は院林村常願寺の分坊にして現住まで十一世、天和二年當町に來れりと、圓城寺は西方寺役僧の分坊せしものにて現住は第二世なり、教願寺は二日町村

普願寺の役僧の支坊せしものなり。
〔佛教婦人會〕 洗心佛教婦人會及び婦人法話會支部ありて厚く佛法を聽問す。

赤十字社員、愛國婦人會員

赤十字社員數は七十五人にして内有功章社員二、特別社員三人、正社員七十二人あり
愛國婦人會員數は九十五人にして皆通常會員なり。

追 補

皇太子殿下行啓

聖上陛下は皇太子殿下に在しませし折、御研精の御思召を以て、僻遠なる北陸へ行啓おほせ出さる。其際わが草深き地の農學校へも、鶴駕を偃はさせ給ひしこそ、永劫忘れ能はざる大なる光榮大なる欣幸となす所なり。

維時明治四十二年九月廿九日、秋天彌高く大氣彌澄み仰ぐ立山の白峯に金色耀き、平野黄雲をなす豐穰は芳香を増し、常磐聖磐の森は喜氣を騰げ、戸毎の日章旗亦祥光を動じ、宇内の瑞寶悉く輝を揚げて燦然たり。

朝まだき星を趁うて燭聚したる五萬の老若、市の内外に充ち満ち古を陳べ今を頌へて歡喜し、禮砲類に山野に轟き壯嚴の氣は自ら天地を祝福せり。

中頃はひより光和らぎ、風無く暑からず寒からずして待ちわびたりし時は來りぬ、午後第一時三十七分御召列車の當驛に着するや二十一發の皇禮砲の虚空に躡りて殷々たる裡に御降車あらせられたり。殿下にはブラットホームに奉迎せる人々に御會釋を賜ひ直に御料の御車に召され先驅警衛殿に進み、村木武官長一條侍從長錦小路主事の供奉員を隨へさせ大練門より數萬の群集の靜肅なる間を御舉手あらせられ徐々農學校にぞ向はせらる。御道筋高齢者の列前に蓮を敷きて跪坐せるを御舉手のまゝ、惠慈を垂れ給ひて御凝視あらせられたるには何れも至仁の優渥なる御心の程を感泣して喜悅せざるはなかりき。第一時四十五分著御あらせられ校門内外の左側に整列せる同校職員生徒の奉迎を受けさせ給ひつゝ、武知校長御案内、宇佐美知事御先導しまつりて、玉步楚々として階上講堂に設けたる御便殿にぞ入御あらせられたり。御少憩の後知事より學校一覽、施設要領、拜謁者名簿、台覽順序の四部を奉呈し、次て校長より東宮主事を經て舊賜の御寫眞を返納し奉り、了て武知校長、鈴木教諭に拜謁を賜ひて後、御寫眞の御下賜ありたり、それより望臺に成らせられ校前田圃に於て行ひたる生徒の室外作業、稻穫、稻干、稻運搬、稻扱の實習を御覽あり、知事は地干と架干との利害について御説明申上げたり。夫れより階下拜謁室

にて文武官に拜謁を賜りたる後、校長の御案内、知事の御先導にて生徒の博物科蜜蜂、作物科芽接法の授業状況を御覽せ給ひて後、生徒控室に於ける室内作業蒞織、俵編、繩綯、蠶網編、箕折、成績品井に参考品室等御順覽あらせられたり。就中箕折については「これは何か」の御下問あり、知事は養蠶に使用するものなる旨奉答し、蒞織には特に御熱心に御注目あらせられ「一日幾枚織れるか」との御下問ありければ校長は知事を經て奉答し、次に蠶網編製作の順序第一第二第三と順次御熱覽を賜ひ、知事より言上の本縣産の産額、輸出先等を一々御聽取あらせられつゝ、英習字蠶製深履及オクラを御覽あらせられ、深履には「降雪の際用ゐるものならん」の御言葉あり、亦オクラを指し給ひ「これは如何にして用ゆるものか」の御下問あり校長は知事を經て其蕪を漬物とし又は胡瓜の如く刻みて食し、能く熟したる實は珈琲に代用するものなる旨御答へまゐらせしに御領きあらせられ、またボンケンにも御留目あらせられたり。

右台覽終りて再び御座所に成らせられ、東宮主事を經て、菓履、オクラ、蔬菜類數種を差出すべしとの有り難き御下命ありけるに一同恐悅して光榮を深く感謝し奉れり。かくて暫時御休憩の後御氣嫌いと麗はしく還御相成り右側に整列せる職員生徒の奉送をうけさせられ沿道數萬の拜觀者を饗はせ給ひつつ福野驛に御着、第二時五十分宮廷列車に召させられ富山にぞ向はせらる。

噫々、北陸の民衆は齊く御威徳の高きを瞻仰して、幸福の無量を歎び、御洪恩の廣きに霑濡して、萬壽の先靈を祈り奉れり。此間民衆一般決して不敬の行なきを勉め、恭敬の誠を致して奉送迎をなしたるは町民の欣喜措く能はざる所、即ち當日より

三日間町内に祝賀祭を擧げ、第二日には祝賀式を度修したり。

福野町及び南野尻より織物壹帖宛を献上せしに御嘉納あらせられ尙本縣假物産陳列場に於て當地織物を台覽に供せしに六點御買上の光榮を蒙りたり。

〔青草市〕 朝市、草市、青物市とも呼び、月六齋二七の早朝より約三時間程立つ所謂習慣市場にして、農家より搬出する品物は多く季節く物の惣類を以て大半を占む。即ち春めく頃の芥子菜、科葱、二年子、大根牛蒡に始まり六月に入りて蒟蒻、生姜、瓜哇薯、胡瓜、豌豆等の他井波の桑畑に栽培してゐる蔦、その山奥、城端の山奥に採る土當歸も出て尙此地方一帯は古來苗物の培養に妙技を有するを以て、六月中旬より茄子苗、越瓜、星芋、仙臺薯、玉蜀黍、蜀黍、稗、地膚、紫蘇等の苗、各種草花苗迄並べ、莢豌豆の出づる頃より盛況を極めて、卍字型の辻を中心に東西南北肩摩擊並暫しは往來杜絶ゆる有様なり。

豌豆が粒になり胡瓜が全盛を竭し、紫蘇の紫朝風に匂ひ梅の酸齒に泌み、世は夏長けて夜短く、曉早く靜風枕頭を徐ろに吹けば、朝暉の旦那も市見に出て隱居閑人は植木屋や盆栽前に大繁昌、桃李の果實累累として徒に小兒の氣を唆り、胡瓜漸く茶色を帯び茄子の淡紫と越瓜の磊々たるが一入目に立ち、總て八月となりぬれば南瓜の尻工合よき程になり、甜瓜が香ばしく響り、而して亦蓮は白く大笹に盛られ、若荷の淡紅小籠に並ぶ頃より新甘藷、西瓜、青蕃椒が出で、芋の子出で、次第に寂々寥々の秋となるなり。されば市毎の商もいと淋しく轉た荒莫として終るを通例とす。

要するに市場は早春と晩秋は閑散にして、初夏より初秋までの梅、紫蘇、胡瓜、越瓜、茄子の出盛期が殷盛の頂上なれば、石動、戸出、津澤、出町、福光、井波、城端の商人の車力卅産も集まり、亦栗鼠の様なる素敏しき高岡商人も入り込み中雑沓混亂するも、大抵町の老人や妻君や下女達の箆或は籠、或は風呂敷を提げ嚮所向を並に辨するなるべし。

斯くも盛大なる市は如何なる組織によりて之を開催されぬるかと謂はんに、極めて漠然たるものにて、單に二と七の朝が即ち草市なりと言ふ頗る單簡なる法一章の他、何等の規約も定款も無く、而して誰在りて之を世話せざれども、五日毎に来る此朝市に據りて小金を獲り日需品を求め得る利便の附随すれば、特に勧誘致さずとも不可なし。然れども昔役場の小使市毎に出で「市役」と稱し風呂敷を持ち廻り、荷を下したる者より幾許か宛徴收し、尙其折未だ入金無き者よりは胡瓜、茄子等を徴發したるも、遂に數の多少より争鬪し折角店擴げなしたる荷を土足に掛くる等、暴威を振ふに至り終に此事有志の耳に入り、一日嚴しく叱責されてより以來「市役」なる者遂に事止み成りたり。又いつかの頃朝市の次第に賑ふに連れ、福野目買の場所を閉鎖して、人馬の通行を阻むが如きは由々數事にやはんべるなりと、其の筋の注意を畏み一時は宮前廣場に場所替を餘義なくしたるも、土地の不便なると僅か朝東の間の事なると、又慣習度し難きものありたるにて情願に及び、許を得て茲に復活するに至りたり。然れども此時より店は必ず兩側軒下に開くべき旨、確乎と申付られたる由にて之に據り是を推察するに、此以前は行當り何處にても頓着なく大々的に開店致したるが如し。

一層廻りて市の原由を釋ぬるに、阿曾三右衛門慶安二年の昔福野開驛請願せし折、其れに附加して——市の儀は近所之市日

にかまへ不申二日七日に御極、月に六才の御札頂戴仕度御座候——とありて、所謂余れる處を以て足らざるを補はんと近村との物資交換をなし、尋いて當町開伸發達の基礎を之に依て固めんさしたるなるべし。翌三年郡奉行國府新助より之が許可を見、大に努めたるも後承應元年に火燭の變ふ所となり、終に藩のお城銀を借用に及ぶ程それ程の困難に遭遇したるも、七年後の萬治元年滞り無く返済致したるは洵に殊勝の事にて其間力行の勞苦決して一様にあらざりしや瞭然たり。

一、承應四年に福野町中縮り之事に付二十一ヶ條總連判に仕置候共、みだりに罷成申に付當年より改、相背申問數旨、私共望申ゆへ今又改、總連判仕り候(下略)

其處市場取付之事

- 一、七日は横町高瀬屋六兵衛より田屋四郎兵衛迄、但市場西東月替に可仕候
 - 一、十七日は同町河崎屋兵助より苗加屋喜右衛門迄、但市場西東月替に可仕候
 - 一、二日は下町高瀬屋兵衛門より十兵衛迄、但市場北南月替に可仕候
 - 一、十二日は同町上津屋加九右衛門より上島屋三右衛門迄但市場北南月替に可仕候
 - 一、廿二日は上町はづれより高瀬屋助九郎迄、但市場北南月替に可仕候
 - 一、廿七日は同町油屋助右衛門よりむろ屋市右衛門迄、但市場北南月替に可仕候
- 右市場如此町中申分少しも無御座候。以上

這是市日制定の其後十七年を経由したる寛文八年二月五日の古文にして之に就き考察するに承應四年には市日に關し何等かの規約決定しゐて是に依り取締りしたるも盛況發展するに伴れ墨條を越えて亂雑に流れ延て如上の規約の制定を見るに至りたるもの、如し。降て天保六年閏七月、町名相唱度旨の願文中——縁方相助、月に六才二七之市日等も今以取繼罷在申候——云々とありて、市日は途絶ゆることなく開設し來れるものなり。

往昔は所謂物々交換したるものなるも漸次町井の揃ふに伴ひ雜貨は町内商店の手に移り、遂に青物のみの市と變革して今日に至りたるものにて、兎に角其徑路は何等妨害らしき妨害も、保護らしき保護も享受せずして、今日迄暢達的伸張をなしたるは我町位置の便要の地に占據せしに由るならん。

因みに歲末廿七日一日限り大市と稱し、膳碗鉢盆下駄等荷も日常の需要雜貨は悉く軒下に開店陳列をなす。此日早朝より人出多く出盛りは午後にして數萬の群衆肩々相摩し商勢甚々として頗る快爽の氣市場に横溢す。

學者、歌人、俳人、循吏、騎士等

(阿曾三右衛門) 利仁將軍五代の後胤、堀河院の藏人定父三郎孝則の嫡流に、越後の國藤田ノ庄司上保行則ありき。行則の嫡孫上保太郎爲則は越中國中村保ノ内上島に居住し、仁徳を數きて善く磯波郡二萬石の領地を治む。偶木舟左近將監暴りに來りて領内の安寧を攪亂せしかば、太郎爲則石黒に滲合ひ鎗を捲き落し之を奪ひて大に強手を勵しめたり。されば將監深く爲則に遺恨し、窺に來り火を放ち其隙に乗じて終に城を落せり。爾來左近の惡行益々噂さ昂じ、領内不穩となりしかども衛無

く遂に難を避け長子爲康を農に次子重信を僧にして神島に留め自ら野尻郷福野に潜伏し居たりき。時に天正十一年にして此地に在ること三十有余年遂に元和四年に卒せり、此間孫市右衛門爲重來りて住せり。

太郎爲則の妾に阿曾照の方あり、本江村の産にして爲則落城後此地に潜流の節、私かに跡に従ひて苦を忍べり。照の方に一子あり三右衛門春雄と名づけ、慶長十六年辛亥年に生る之乃ち開市者阿曾三右衛門なり

恩光寺に藏せる宮永正運氏の碑文に

阿曾三右衛門者越中郷士阿曾孫八郎慶行之後胤也長享戊申年加州之民冠于刺史富樫政親慶行爲其魁最有戰功然以事出于不得止後埋跡不知其所終所以史不載也故子孫世系未詳云蓋三右衛門慶長十六年辛亥歲生磯波郡本江村云々

三右衛門人と爲り豪邁卓犖にして夙に公利を興すに意あり、嘗て以謂く南城端より北石動に到る六里、東井波より西安居山に至る三里、其間に處る里民多くは麻苧を紡ぎ賣ぎて以て米鹽に易ゆれども、各道路迂曲して甚だ便ならず、且つ小矢部山田の諸川其間に横流し時に或は漲溢して人馬の往來を阻つることあり、是れ利民厚生の本にあらずと慶安二年近傍有志と計り、終に金森長左衛門と連署して郡奉行國府新介吉明に具申して、福野町を開き互に市日を約して里民に便し米穀酒醬絹布等の交易を始めしかば、戸數次第に蕃息して今日の盛賑を見るに至れり。同四年福光領の荒地に新町を拓き大に殷盛に努めたり。

初め磯波郡の上納米を納むは、城端、小矢部の二倉廩にして税吏徵賦の令一たび出づれば郡中の人馬相踵き晝夜絡駟として絶えず、然れども冬季は風雪に阻てられて多く期を愆り謹を被ふりしかば、三右衛門情を官廳に訴へ明暦二年津澤村小矢部の東岸に官倉の建設を見るに至り、川上の倉米此地を以て津湊と爲す、則ち城端井波宗守福野の粟米並に運びて伏木浦に輸送する迄に至れり。三右衛門素志就りし後、居を津澤の北隅に移轉し雞髮して參禪の徒となり貞享四年丁卯九月十八日七十七歳にして逝く、恩光寺石橋和尚引導を授け應機通心信士と謚號す亦天明六年丙午秋八月菅山下隱士宮永正運氏其碑に銘して曰ふ

荒々古墳。蕭々草籠。應機開里。通信卜庵。非史非牧。成功是男。射水布澤。野人嘗甘。阿曾之胤。出青於藍。沒後百歲。萬人尙談。

〔田中其汀〕 田中家は敦實親王十四代の孫田中出雲守氏剛の後田中ノ五郎左衛門と稱し江島に居り永祿十一年江島退去の後磯波郡上川崎村に來り住し其三男を田中清左衛門成忠といひ、即ち其汀の父にして福野に來り田中家の祖となる。其汀和歌茶道に通じまた俳諧を好み元祿元年三十五歳の時十哲俳と應酬したりと云ふ。

〔其水〕 其汀の子にして俳句和歌茶道を嗜む俳人千代尼亦爲に來り留ること二年余に及べりといふ。

〔蟹山〕 其水の子、朴直寡言にして俳諧種樹園藝を好み本草學に通じ且つ醫事に達し藥舖を開きしと傳ふ。

〔列戶〕 蟹山の子、俳歌を善くし豪飲一升を傾け任侠自ら居る多力にして劍を愛し又尺八を好み御室御所の虛無僧日本本則書を受くと云ふ。

〔崎良平〕 文政九年に生る田中清兵衛の三男にして別に一家を起せり幼にして穎悟學を好み宮永菘園佐伯櫻谷等に就き經學詩文を受け、天保十四年上京して村田誠齋の門に入り醫方を學び旁ら經學の師に就き苦學すること數年業大に進む。嘉永四年病を以て郷に歸りしが兄歿するに會ひ、自ら膝下の奉養を任とし醫を郷に開き旁ら書を講じ從遊の人多し。事藩に聞え徵命ありしも應ぜず。明治五年興學論を草して新川縣に納め時に學制頒布に際し即ち明治六年三月郡内各地に率先して、有志と謀り福野小學校を開設し又同校内に設置せる教員講習場副師範心得となり爾後専ら同校に在りて育英に従事し多く人物を養成せり十七年文部省より教育勤勞を以て三等賞を賜ふ同年辭職して風月を友とし旁ら醫を業とす明治三十七年七十九歳にて歿す。

〔五島寛平〕 四代五代共に俳句書畫詩文花語曲に精通し四代寛平氏は寺子屋を開きしといふ。

〔福富翠園、同錦園〕 父子は書を能くし平安の人劉君平大に父子の書を賞したりと云ふ。錦園の門人數百人其碑を恩光寺城に建つ。

〔柴田東洋〕 其先は柴田勝家に出づと云ふ。東洋は當主逢太郎四世の祖にして刻苦精勵經學に通じ、兼て詩文を能くし遺詣深かりしと。

〔福山〕 寺田源助氏の嫡にして後に軌道と改む、幼より學を好み俳諧を福光の人吉崎破笠に學びしが或日「暮にあきて暮笥を枕の晝寝かな」の句を吟して破笠に示せるに、破笠一瞥して是れ好甚者の種祕を穿ちしものにあらず宜しく意趣を練るべし

と乃ち馳ちて京に走り新道を研究して名を揚げ近江國栗津義仲寺に幻住の跡を占め二條家に椎の下宗匠を辱うし、圓滿院宮より觀月僧都の號を賜りしも尙浮雲と共に四方の風月に遊び「涼しきや人も心の置處」と南海の端なる宇和島に於て終焉す。

元治二年乙丑親友相謀り檀那寺なる古殿山西方寺の一隅に碑を建てたり

跨かるゝ川にも橋や御代の春

雲にさへ黒みののけて秋の月

黒髮塚管地の文

某人は舊きをよろこび俳諧師は新らしみを好む其新古いづれか(破損)ならん、ここに元祿の音浪化上人の許へ伊賀の也庵法師に送られたる祖翁の黒髮に予が庵の墓の小石三片を添て淨蓮社さいふ念佛道場の境内に一塊の墳を築せたまふ其のち其角よりちいさき石に手向の句を染て送りしも又收めしとさん 翁在世の頃よりかかるやんことなき方々の高徳を慕るゝ事いと尊し今二百年其近き星霜を経れば樹下の雲に土流れ犬鼯の通ひに石ゆるみて見る甲斐もなき有様を社友の集りて今年六月草庵の垣内に築替らるゝにその墳のうちなる黒髮髪みつの小石晋子の手向の眞蹟いつれも眼のあたりに見る如くなればいよいよ温故知新の風雅の魂に勝を染られたり噫この黒髮庵有て風流に志のうすき族は書の儘に書を用ゆるは書なきにしかしとある孟子の語の如くにして花の都を夜通る類ひなるべし

根の玉の香を貫きて水舞花

嘉永七甲寅初冬湖南義仲寺藏山

〔山田六右衛門〕 累代循吏を以て一郷に名あり。六右衛門は、山廻新田裁許を経て、里正に任せられ、戊辰の後明治元年九月、越後柏崎民政局に奉職し、其間新田裁許を、矯正景に取扱はしむ。明治十七年歿す。

〔同正景〕 明治元年新田裁許となり、二年十一月新川郡塚越村忠次郎の煽動に依り、百姓一揆の起るや鎮定の爲め兵を率ゐて、岩瀬迄出陣し、事平きて歸る、廢藩後種々の公職を歴任して三十四年歿す。

〔福宮春涯〕 與太郎の父にして勤王家なり、京に入りて縉紳に出入し安政志士の中に加はりしと云ふ。

〔西島屋誦親〕 易に通じ、弘化嘉永間の人崎士なり、清廉にして金は土芥の如く、兒童を見れば喜て與ふ。嘗て山田家より服を贈られ盛装して市に出づ、途中乞兒に遇ひ其單衣の寒に堪へざるを見て、衣を脱して之に與へ、平然として歸る。詩文を善くし、豪酒自ら喜びしと。妻子なく其後絶えたり。崎良平氏も亦、嘗て學びしといふ。

〔山田夢里〕 七彦と稱し、六右衛門の從弟なり。俳諧に通じ蕉門の名士と應酬す。明治五年戸長となり、町長等の公職を経て、明治三十一年九月歿す。

此他漢籍に通せし學者に、長崎某、杉坂敬一等の諸氏は本町に在りて青英薰陶幾多の人材を出したり。

〔田中氏城趾〕 城趾は當町新屋敷村にあり其面積約壹千坪にして、五尺乃至壹丈の土壇を残す。延元元年足利尊氏桃井直常をして越中守護に任ぜしや其勢力甚だ旺盛なりたる爲め其臣田中權左衛門貞行も此地に居城を築きしなるべし。然れども幾

許もなく豪族の陷す所となり、遂に討死したれば農民城趾東北の地に埋葬供養なしたりと。復た此末裔田中太郎兵衛が居ても曰ひ、土族は城趾を五郎兵衛山と呼び、敬ひて奇石を拾ひ神体に祀り一祠を建て今に至るも相警めて侵す者なし。

〔我が町と新聞〕 僅に六百有余戸を數ふる我が町の人々の環境と歸向及び趣味等を、最も手つ取り早く知るべく、日々の事象の推移若くは動搖の報道を敏速に齎す新聞紙並に其數に依り窺ひ得べく掲げて一考に供せむ。なほ左に記せし以外に、商事及び染織に關する新聞あるも、あまりに夥多に就き之を除けり。

年別	縣内				縣外				合計
	北陸高岡	富山	石川	計	大阪	東京	關東	計	
明治三十年	三	六		九					九
明治四十年	六五	三五		一〇〇	一八	二			一四四
大正七年	三五	一八	六五	六八	八〇	五五	四二	二六	二二八

大正八年大正日日新聞の發刊を見、縣外新聞紙中必ず一頭地に抜きんするならん。

遊樂

〔勝手より〕 機業其他工商の状態を視察し、或は製品の購買、原料の販賣に來る紳商、年中其跡を絶たざれば旅館は請般設

備の完を期し、遇するに懇切丁寧の款待を盡すと雖も、亦夜陰に乘じ獨手より攻察をなす勇士もあるなるべし。料理家は孰も宏莊なる樓閣の建材に杉柁を用ゐて清雅を企し、庭園泉石の風趣に深きを凝らし、掛幅扇額に名士文人の書畫を好み、器具亦古き滋味の多きを喜ぶなど、全く地方人士の趣好に適合せるなるべし。それかあらぬか麗人は婀娜にして而も清奇の装ひを持って濃艶ならざるは全く斯る青樓に相應しく殊に地方醜造の芳醇に杯數を重ね、心情自ら佳境に入りて陶然たる時、紅唇より洩る絃歌を耳に娛み、其嬌やかなる花顔に恍惚たらんも敢て蹙蹙せざるべし。然れ共余り興に酔ひ甘言に乗ぜられて無形の羅網の爲めに捕虜にさるゝこそなきにしもあらざれば、其の處君子は危きに近寄らずが即ち安全第一の平法虎の巻の極意と知らる可し。

〔劇場〕 福野座は辰巳町にあり、其始め惠比壽座と呼ばひ、改めて常盤座となし、近時改修を加へ面目を革めて福野座とし、布袋徳太郎氏の經營に依り每興行頗る非常の好評を博しつゝあり。

〔球突場〕 横町大和樓向に在り、斯道の天狗連蟬集して闘技に余念なし。

下 編

附近人物名所史蹟

〔勤王烈士宮永氏〕 贈從五位宮永良藏氏は西礪波郡西野尻村川崎の人、宮永東作の嫡にして、實名を正純といひ、通稱良三を以て呼ぶ。天保四年正月福光に生れ、幼にして姑を喪ふ。人々爲り剛邁にして氣を負ひ又大義に通せり嘉永三年京師に上り、角山某に就き醫を學び、既にして業成り居を智恵光院上立賣下ル町に卜して醫を開く。安政五年母を迎へて奉仕せしかど、明年九月母病みて歿せり。時に



宮永良藏先生之碑

國家多事、諸藩の志士勤王の大義を唱ふるや良三徳大寺卿の恩顧を被ふりて、竊に機密に關り伯父釋玉瑛等と俱に勤王有志を招いて、専ら國事の爲め周旋奔走大に力めしかば、新選組と稱し俗に壬生浪士なる者等之を偵知し、一條の辯對する事なく、良三を捕縛し、西本願寺なる陣營に囚へて、拷訊し、且つ同志の所在を糾問すること累日、鞭笞連りに下して完膚なきに至らしめしかど、忍受よく鞠責に耐へ遂に何事も告げずして放免されたり。嗚呼大節卓然其

所信を貫き君國に盡して範を一世に垂れしも身體數箇所の疵は起臥の自由を失ひし加之、疲憊勞衰、醫すべき術無く、終に慶應三年十二月二十二日年三十五にて早逝せり。同志其非命に斃れしを聞き痛惜哀慕の念禁せざるも英靈の弔悼を許さざる時勢に於て反て悲痛の憾みに刺戟を得て壯烈なる活動の奮起を招致して大成を促進せしめたり。

妻女、夫の囚るる累を同志に及ぼさん恐れ、書牘一切を焼却せりと。

明治二年三月、勤王の志、厚かりしを嘉し給ひ、小林民部大輔賴三樹等十七士と共に東山靈明社に祀られ、且遺族に扶持米を賜りたり。明治四年更に靖國神社に合祀せられ、明治四十五年五月廿七日特旨を以て従五位を贈られたり。

大君に事へそまつるその日より

我身ありとは思はさりけり

此の歌は氏が愛誦せし古今の志士がものせる物を連記したる其末尾に讀人不知となしありたるも、這は當しく氏が迷懷を故事に斯くは記せしものなり、其思慮の到れるを推察すべし。大正六年は氏の五十年忌に當り其遺徳を欽仰して縣教育大會の主催にて嚴かなる慰靈祭を執行され、又大正七年郷土の教育會主となり地方人士の協賛を仰ぎ、此の純忠至誠の烈士が碑を邸趾に建立して、英名と頌徳の事歴を刻し、以て後世民衆に崇高なる犠牲的精神の國體精華に及ぼしたる効果の偉大なりしを納得せしめ、奉公大義の觀念に人心の堅實を計りて國力の擴充に資せんとせしは、英名を永久に照炳し得ること共に寔に時宜に適へるものと謂ふべし。

〔宮永家〕 幕末勤王の烈士良藏を産める宮永家は、往昔田村磨と勇武の英名を均しくせし藤原利仁將軍の後裔にして、福野の開市者阿曾三右衛門春雄が出たる上保家と同系なり。

將軍の長子は越前に住し、次子は宮樞次郎にて代々加賀介にして、彼の安宅關にて辨慶が孤忠に仁俠を示したる左衛門祐直も其の裔なり。復宮樞の支流に林氏あり國員の代に至りて加州宮永村に居住したるに因みて氏を更へしが抑も宮永家をなしたる始めなり。國員より六世正澄は北畠顯家の招聘に應じて吉野行宮を



宮永良藏氏の眞寫

守護し奉り、正澄の子正泰孫正晴は共に忠義の心厚く吉野朝廷に奉仕し正晴より五世正善は上杉謙信に従ひ其子正英正英兄弟は秀吉に仕へて小田原の役に殊勳を立て、正英の子正善は前田利長の下に在りて元和の戦ひに出て武効を顯せしといふ。正善の弟正意父病没後越後國の親族に赴かんと寛永四年母を伴ひ郷土加賀國江沼郡瀧ヶ原を出立し、途中安居寺に詣でしに住職學遍師に留められ山下の幽靜なる地に閑居したるも、程經て郡奉行原五郎左衛門の勧めに依り、下川崎村に移りて代々農を業となせり。斯くの如く良藏の家は名門の舊家にして草高千有金石を有し、家系連綿として幾多の人傑輩出して或は國事に奔走し或は地方開展に盡瘁したり。

宮永正運氏は享保十七年正月に生れ、長じて山廻役裁許、内見分等の諸役を務めし、徳川末期に於ける農政學者にして私家農樂談六卷、養賢私記一卷、荒年救食志一卷を著し、亦和歌を好み連歌俳諧に通じ詩文に達し本草學に精しく茶道を味ひ參禪して觀念を凝す等、全く博學多識の士にして、越の下草、蕉門口傳とを殘して文化元年六月七十三才を以て逝去せり。

其藏の祖父恒右衛門正好に男子十一人女子一人あり皆揃ひて衆に傑出せるも、中熟長子正作(菅山)は國學に通じ、亦幼より畫を好み京師の中林竹洞に就き其精妙を會得し畫體漫言なる著あり、三子菽園は細川侯の儒官となり數十種の書を著し、四子虞臣(牛儒牛佛、大倉)は易の蘊奧を知り儒佛兩學を究め延岡侯、脇坂侯に仕へしも薙髮して諸國を流浪し偶一橋侯登庸せんとせしも固辭して尙四方を遊歴し後福光に没せり、六子東作(陽谷)夙に金澤城下に醫を學び、後京都に赴き三宅橋園に經史を修め、更に江戸に轉じて醫術を研究して郷土に販り、術を施し傍ら地を劃して藥草園を設け日頃の研精を實地に攻究し、九子柳平は鍋島侯に仕事して藩政に敏腕を振ひ、十一子以足は富樫の姓に復し、俳諧の大家にして「月の障や夜寒のもし藪を射る」の自作と、去來の「應々といふに叩くや雪の門」嵐雪の「梅一輪一輪はとの暖さ」其角の「明星の櫻のためぬ山かつら」丈草の「蚊厨を出て又障子あり夏の月」の五句を古瓶に連記せしものを庵室の往訪者に示して笑へりと「合点かま眼さきへ落ちし一葉かな」は絶吟にして、「足もこの文に明るき枯野かな」は讀篋の中より出しものにて、其跋に曰く、こは辭世にあらず又辭世にてなきにもあらず、たゞ世を見とふしたる枯野の句なりと。女子名は誠京都に遊び徳大寺家に入出入して、元治慶應年間に於て、勤王志士を援護したる女大夫なり。

教育機關の具備したる現時は謂はず、封建時代に斯る俊材を、而も斯る邊僻より羅致し得たるは、正しく遠祖利仁將軍よりの崇高なる思想傳統して、累代偉迹を殘せしに由縁する所ならむ。

因みに俳聖芭蕉翁元祿二年奥羽の行脚に春夏を送り、秋風たつ頃——早稻の香や分入るみちは有磯海——と越路を辿り川崎村宮永家に逗留して「人々川崎まで送りて饒別の句を云ふ其かへし」とて——麥の穂を便につかむ別かな——など口吟み程經て出立せしかば浪化上人は「翁當國の行脚も知す良程を經て其句をまふけ其人をしたふ」とて——早稻の香や有そめくりの杖のあと——をさ追懷の筆を把られたり。

尙宮永家へ蕉翁が金澤より送りたる禮狀は今福光町石崎謙吉氏の藏する所となり禮狀と伴にありし「あかくこ陽はつれなくも秋の風」の句は津澤宮永家にありと聞く。

〔安居寺〕 福野町より西十八町、安居山の中腹にある眞言宗の古刹にして、養老二年印度の僧、善無畏三藏正觀世音の尊像を携へ來朝し、遂に此地に來り老翁に會ふ、「我は此山に住する者なり、所は木の葉の里、山は菅の山」なり、と教ふ。傍に石の禿倉に、地藏尊在しければ、善無畏有縁の佛地と歡喜し、草堂を結び、即ち兩尊を安置して、一夏九旬の間、安居供養せしに因みて、安居寺と稱すを傳ふ。聖武天皇の御宇、勅願所と定め給ひて、行基に勅して、觀音の立像を刻せしめ、三藏持來の觀音を祓佛となし給ひて、南北は桑山より蟹谷の郷に、東西は不動池より小矢部の流域に至る領地を許され、其上香稻三千束を御寄進あり、なほ觀音堂、灌頂堂、金堂、講堂、大塔、西塔、經藏、十王堂、鐘樓、仁王門、鎮守堂、坊會、二

十四坊等、甍を駢へ、時代建築の精華を極めしかども、承平天慶の頃火災に罹り、尊像のみ難を瀬谷に避けたり。爾後靜穩に販するを待つて堂宇を造營して、舊狀の如き道場に復しぬ。

入皇六十五代、花山法皇、諸國靈場行脚の際、當山に一年有餘參籠ましまし後、加賀國那谷寺に玉趾を駐めさせられしが、毎年七月小原左衛門尉清原節光を御使として、代拜せしめ給へり。此使の通りし蟹谷の山路を小原越と云ふ。壽永二年、磯波山の合戦に木曾義仲の將、根井小彌太二千余騎を率し、此彌勒山安居寺附近に陣せしといふ。

興國三年宗良親王、名子浦なる、石黒越前守重之の館に、入らせられ、間もなく牧野の里に潜匿相成り、磯波の地の勤王の士を語らひあらせられし折、當山に吉野朝廷の興復を御祈願し給ひしと。正平年間、桃井播磨守直常、當國に於て合



安居寺

こと十有余年に及ぶ。折しも御不例に罹らせられ、元中八年三月十八日遂に此邊陣の一角に崩御あらせられたり。僧侶始め、近郷の衆民馳せ集り、考妣に喪する如く、哀悼し泣く御尊骸を驗め奉り、御陵を丘山の如く築かんとせしも、時

*戦せし際、又々兵燹の甚と化し、寶物舊記等逸散したるも後堂宇を建立して本尊を安置したり。天授四年の春、長慶天皇諸國行脚體に寢させ遙々此山寺に御潛幸、駕を駐めさせ給ひて朝夕勤行御齋修相成り、僧侶を撫し、勤王の士を御糾合、只管時機の到來を持ち玉ふ

勢を恐れ、且つ御遺言に基き畏れ多くも、御墳墓の型をぞ残しまつれり。

噫吁、天皇は御諱を寛成、御法名を、金剛心院、または覺理と號し奉り、後村上天皇第一の皇子にましまし、後嵯峨天皇より、正統第十一代に位し給ひしに、御歴代譜にも御登列無きこそ恐れ多き極みなり。

其後、足利慈照院義政公の時、越中石黒郷にて、百三十貫文の地所加恩田を寄附され、供養怠らざりしが元龜天正年間に於て上杉勢佐々軍等の戦に遇ひ、一山諸堂悉く廢頽し、僅に一堂を構へて本尊に奉仕せしに、文祿二年婦負荒山城主岡島備中守、藤原一隆朝臣の室、月清大姉、報謝として本堂を造營せり。其後前田利家公、厚く信仰、屢々立願せられ、利長公の代に至り、覺鐘一口御寄進あり尋て、慶長十一年三月、利常公當山に參詣の際本堂修復、同十六年五月利長公不例につき平癒の爲め一堂一字御建立あり、快復後本堂、神明宮、白山宮、辨財天堂、鐘樓、仁王門、繪馬堂、手水鉢等悉皆建築せられたり。尙元和四年微妙院殿利常公、參詣止宿の折寺領二十石、並山錢三百文の地所を寄附せられ、門前地諸役免除の沙汰ありたり。爾來三百年前田家祈願所として、正五九月の御祈禱、札守献上を申付られ、寺格待遇も淺からざりしに、王政維新に際し寺領山林は土地と相成り一時廢頽せしも種々保存の方を講じたりといふ。有名なる親は三歳、子ば五歳の繪馬は、利常公の奉納せしものにして桃山美術の遺物たる聚樂第の鏡戸なり。金箔地の板戸に、二枚は狩野法眼元信筆にて三歳馬を、一枚は寶子永徳筆の五歳馬を描きしものなり。此他寶物として宗良親王の神息之太刀、光典司の屏風等あり。寺境森々として、幽磬疎鐘朝昏を送り未だ練眞修道の好地たるを失はじ。

心にはゆるふ時なく菅の山

家持

すがなくのみや戀わたりなん

しら糸のすがの葉山の月まつこ

後九條内大臣

くるる夜かけて搦衣かな

春はなほ日影もながき菅山の

衣笠大臣

みらくもあかね花の色哉

いろそむる木の葉の里のから錦

九條内大臣

あらくなたちて菅の山風

しくれ雨まなくし降れば名にしおふ

光俊

木の葉の杜も色かはりゆく

ちりまかふ木の葉の里を立別れ

逸名

さそ住よしと秋も行くらん

吹くもる風のなとこそ寂しけれ

頼家朝臣歌合

木の葉の里の秋の夕くれ

秋ふかみ山風そひてしくるれば

木の葉の里そさひしかりける

山里は庭の梢の音までも

西行法師

世をすさめたる氣色なる哉

やぶなみの里に宿かり春雨に

大伴宿禰家持卿

こもりつゝむさ妹につけすや

〔高瀬神社〕 福野町の東約壹里高瀬村に鎮座し、古く高瀬神社と云ふ。又高瀬大明神とも稱し、一に氣多神社とも稱す。其鎮座の時代は史籍に徴證なきを以て、今より知るに由なしと雖も古傳に據るに、太古、大己貴神北越御經營の時に當り己命の守護神として、天活玉神、五十猛神の二柱を此地に祀り置き給ひて、即て此地方を平定し給ひ事業成り竟りて後、自の御魂をも鎮め置き給ひて國魂神となし、出雲へ版り給ひしといへり。光仁天皇の寶龜年中、既に神階を授けられたるに據りて察するに、其上代の鎮座たること明かなり。延喜の制に小社に列せられ中古より當國の一ノ宮と爲れり。故に歴代の崇敬、武門の尊信、萬民の敬仰するところとなりたり。社領頗る多かりしも、中古兵亂に遭ひ、僧徒若くは武人の爲め横奪せられたり。現今の本殿は天明三年の築造に係るも、拜殿は其以前の建立にして喬樹老木とともに、古色蒼然其創建の遠きを偲はしむ、明治六年縣社に列せられ大正七年國幣中社

に内定ありたり。

附近に神子屋敷、鎌倉屋敷、大宮司田、神社畑、権現田、大鳥居、下馬場などいへる地名存す。

〔善徳寺〕 福野驛

を距る約六哩、中

越線の終点城端町

にあり、眞宗大谷

派の別格別院なり

文明四年本願寺第

八世蓮如上人が加

賀國砂子坂に本寺

を建立せられしが

後ち山本村より福

光に轉じ、天正元*

炭酸瓦斯の發生烈しく鳥獸之に觸れ斃死せしを以て俗に鳥地獄と稱す。山高く眺望佳なるを以て浴客頗る多し。



梅の大樹に庭さびて 夏の雨見居り 井泉水

*年城端城主荒木大膳、其城門及城廓を寄附せしにより此に佛堂を構へ移りて今日に至れり。境内六千二百坪余、亭々たる巨樹老木、伽藍の壯麗宏大なること致して瑞泉寺に譲らず、本寺第六世空勝上人、武事に長じ元龜元年以來石山に籠城し、織田信長と戦うて功ありし端といふ。毎年七月二十一日より二十八日まで夏の御文拜讀行事の折、別 什寶の虫干展覽あり。

院 〔立野原射撃演習地〕 城端の盡頭にあり、明治三十二年十一月及三十三年七月の二回に陸軍省に於て面積九十八萬二千有餘坪を買収し設置したるものなり。

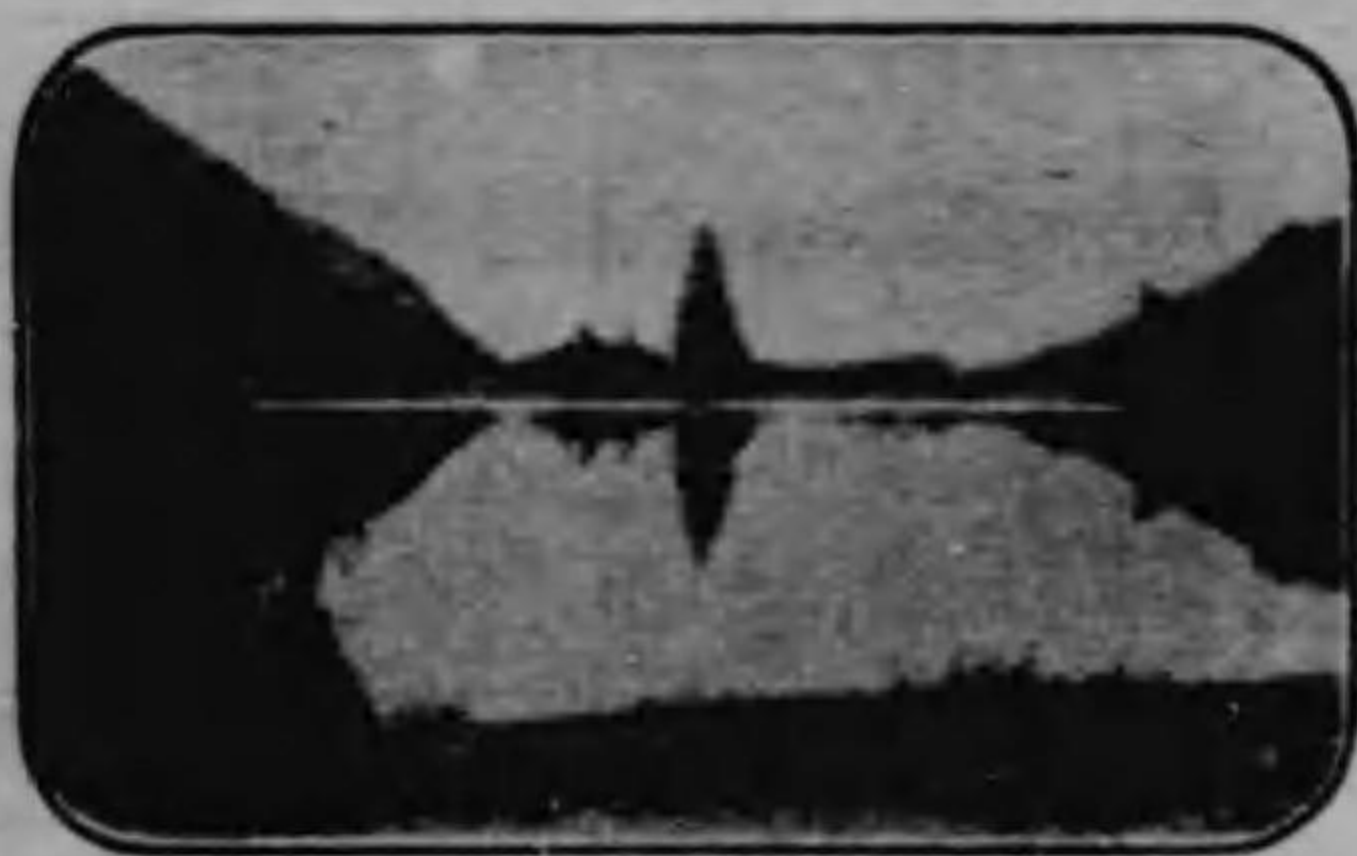
〔林道、酒池噴泉〕 共に城端町の南約一里大鋸屋村大字林道にあり、何れも炭酸泉にして脚氣、痲瘋質等に偉効あり、往時酒池と稱へ、

繩ヶ池 城端の南、糞谷村の南端、山上一里の處にあり、周圍十八町、東岸に一大巨巖あり鐘岩と云ひ、山腹に一怪岩あり七ツ岩といふ、風致頗る佳なり池水清冽、玲瓏點埃を止めず、深き測るべからず大旱にも涸れず、霖雨にも濁らず飲料に供する者四百余戸、灌漑の利亦大なり。口碑あれども略す。

〔木葉石〕 糞谷付入會山の赤祖父谷に在り、炭酸石灰を含有する水池中より滲出し、深谿幽谷の中樹木繁茂し、其葉落ちたる間に石灰分沈澱之に附着し、年月久しきに互りて岩石に化し、落葉の腐朽するや自ら石面に楓柏等の葉型を現す、之を木葉石といふ。

〔五箇山〕 越中の三大川の一たる庄川(射水川)の上流を雄神川といひ水上飛驒に跨りて白川と呼ぶ。其庄川白川の流れる谷間、飛越の國境に互る一廓の天地が乃ち五箇山にして、赤尾谷、小谷、下梨谷、上梨谷、利賀谷の部落より成り今は行政上、利賀、上平、平の三村に分ち東礪波郡に屬す。

其人情風俗言語に越中化せず又飛驒訛を交へざる別趣を有し、家屋自ら異彩を放ち茅葺屋根の大にして高く聳てるに比し、其朋あまりに短く宛然燒小屋を出來得る限り大きく建てたる如し。其家々の破風の處に、二段三段に障子の嵌りし奇異なる外見を呈するは、天窓裏が二階三階に仕切られたるを知



池ヶ繩

るべく、又風習として一家同族五十人程の合住を例とせり。其構造も一抱に近き大なる椽も蘿蟲の類にて緊縛する等凡ての所作、目に映する物象は太古の様も仄く一種の遺物の如き感じを與ふ。开は往昔、波の屋島を遠く並に隠逃せし平家の一類を祖先になすに因るならんを傳ふ。其形大なる菅屋が深く陥りたる溪壑と峻嶒な峰、翁爵たる保護林、清冽なる瀑水、十數里に互りて斷續盡きざる奇岩怪石等の奇景と相待つて、脚下地軸を轟かして險崖を走る雄神川の急湍奔瀾とは久しく山水の間を跋渉放浪して雲霧に麻痺したる探勝家達の眼にも、如何に清新に愉快に、重々しき奥行のある深き印象を刻むことならん。



五ヶ山景

雄神川に輕舟を浮べて碧潭大渦洶湧の凄愴たるに、或は水岩相闘ふ激湍を下り奔流と急駛を争ふ偉觀を擅にし飛沫に袖を濡らすも旅趣の快境たるを失はざるべし。



五ヶ山中雄神大川渦卷

此地一方帯、頗る瘠鹵にして米穀に乏しく藷、生糸、苧、石灰、紙を多く産出して食料品と代ふ。概り麥、粟、黍を常食とし海魚も皆乾魚鹽引を以て珍味となすといふ。されば生魚の如きも池の鮎、川の鮎、嘉魚より他之を知らず、試みに小學校生徒に蒲鉾は？と問へば板に乗りて泳ぐ魚、鯨は？と云へば其形砥石の如しとは有名な答案と聞く。部落の人々素朴なれども、流石平家の血を承け悠暢にして古雅なる遊びを致す。されば數旬の滯留決して無聊を感ずることなく、客あれば米の代りに新蕎麥も盛り、鷄も割き殊に鮎、嘉魚の美味に一盞を傾けつ、傳來の麥屋踊を觀て興に入るもまた妙なるべし。



五ヶ山景

* 麥や菜種は二年で刈るに麻が刈らりよか半土用に。こなた座敷の床の間の惠比壽鯛をか、へてにこゝと。こりのおやぢは西の年の生れはが、い重ねておめでたう。聲のたたんときれぶ

麥屋踊は笠踊ともいひ、笛、太鼓、尺八、三味線入りの賑やかな囃に俗謡を和して、踊手は紺の半纏、紺の股引といふ伊達姿、笠を手にして品よく踊るなり。*

かの白根とせきく菖蒲をこまかにきざんでやげんでおろいてあかがねやくはんでからくにつめて親より先祖代々傳はる五郎八茶碗に二三椀のめば聲もしなよくたちまする。



五ヶ山景

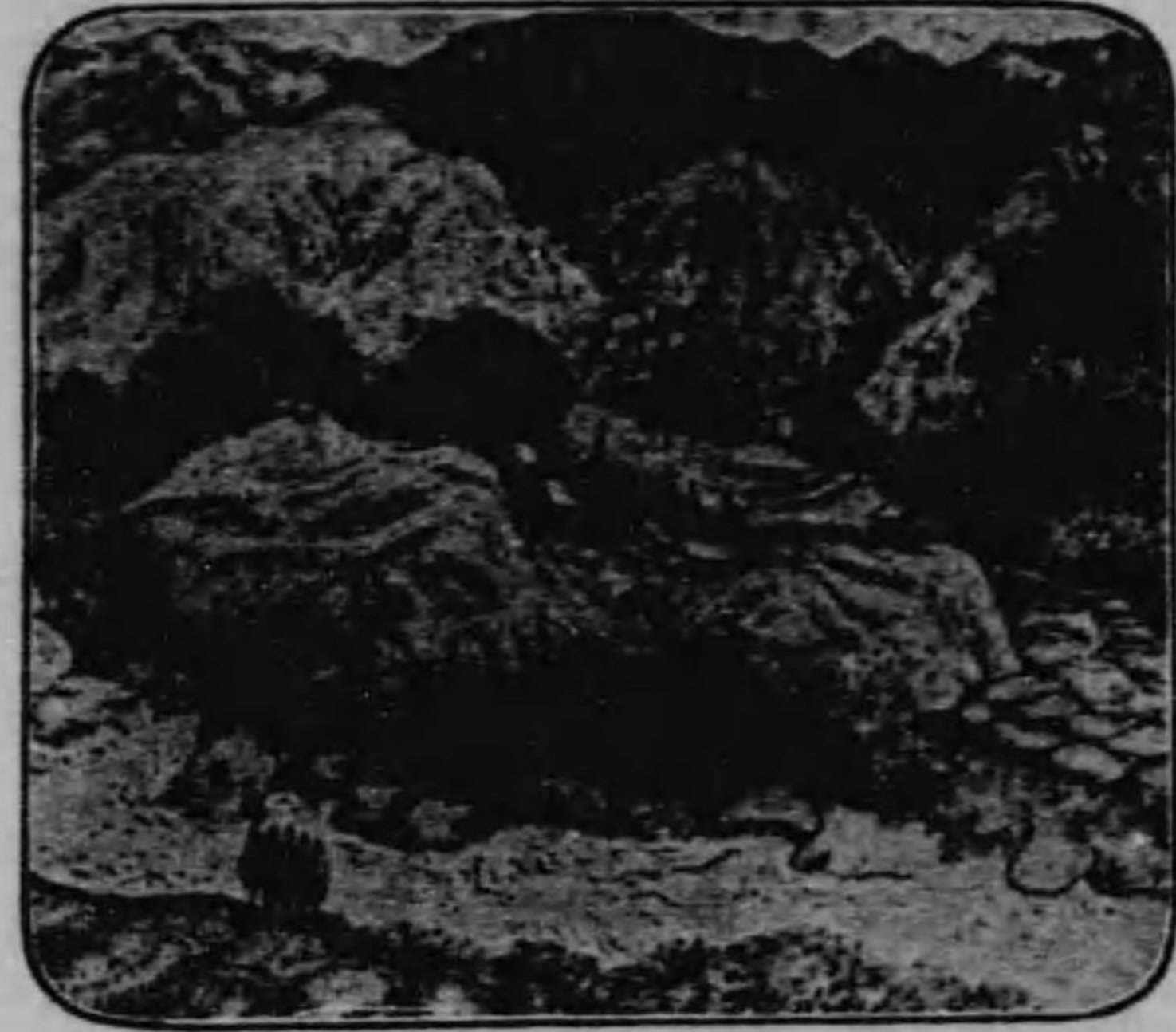
又神樂踊コキリコ唄まで囃すものあり女白絹の髪紐を頸に掛け後にて之を結び白絹の帯を掛けて毎年中秋の頃笛を吹き鼓を打ち鉦金を鳴して之を囃し、筑子竹の打様は七五三三三にて女竹の長五寸五分丸竹二本ありて之をコキリコの二ツ竹と唱ふ其歌謡に「思と戀と篠舟に乗せりや思ひは沈み戀は浮く」「波の入島を逃れ来て薪こゝるてふ深山邊に鳥帽子狩衣脱棄て今は越路の袖かたな」「向ひの山に鳴くひよ鳥のなきては下りなきては上り朝草刈の目をさます」等あり。

〔天柱石〕 奇巖の尤なるものは天柱石にして、城端より四里平村松尾の高原にあり、巨岩斜に屹立すること百二十尺(巾二十五間)其狀怡も大魚の天に沖せんとして半身を顯はすに似たり。蓋し天下の奇觀とや云わん古來探勝家の來り遊ぶ者多し。

〔赤尾道宗〕 往古赤尾村に彌七といふ人ありき、深く佛恩に歎善し徳行多かりしと傳ふ。道宗とはその法名にして今同村に行徳寺、道善寺の二箇寺あり共にその末裔といふ。蓮如上人一代聞書四五に道宗が徳行の一斑を載す。



五ヶ山景



五ヶ山景

○ 碧梧桐氏

主僧料理イロナ脛を 夏季とこそ
梶の木を 折り見する 葎 大枝も
奇勝いつまで岩緒う百合も見まさりて
目くるめき橋を來つ峰雲越し方に
笈 跨ぎ 行く 里の 金蓮花なご
人眞午實の 惜し 桑を 裸にす
白川 葎屋の名残や町を清水 走す
下閣なれど 川音も 馬の背 越し道
蛇葎の 夕明り 謫所なりし 聞く
水流しの 冬思ふ 葉 櫻の 風



五ヶ山中風俗



五ヶ山茅屋

白川特有の俗語ロジマ、コダイジンを聞く
 男三味線いづれ早百合女一節を
 明日は田植三味の名残を母家にと
 繭上りなご語るまこ女夫らし

○ 竹の門氏

葎とあやまつ浅葱の香や桑枯に
 杉圍む藁屋四五瀬音添ふ紅葉
 樋の朝靨の末咲に繭煮る女見て
 夏の岩魚の味思ふ新山葵あり
 夜糲摺る唄聲よきなどよめきて
 雲迫れば雨雲飛べば皆紅葉
 栗焼て時移す産業談も聞く
 山抜けの石磊々落葉木も立ちて
 牛舎牛鳴かず白菊はの見えて



五箇山の景

温泉の戸閉つ客五六噴星夜寒

暴風名残る倒れ樹と捨舟の秋

鳴く牛に櫓干す水車休めある

温泉名残る落葉晴嶺新運ぶ

舟待てば四十雀窓近き枝に

炭舟にて庄川を下る

鶴鶴相追ふ瀬光り早き舟脚に

大佛岩の紅葉仰ぐ山を拓く音

河鞍を組む焚火時雨雲馳せて

金屋村

笹鳴の柚子の里阿高晴るる

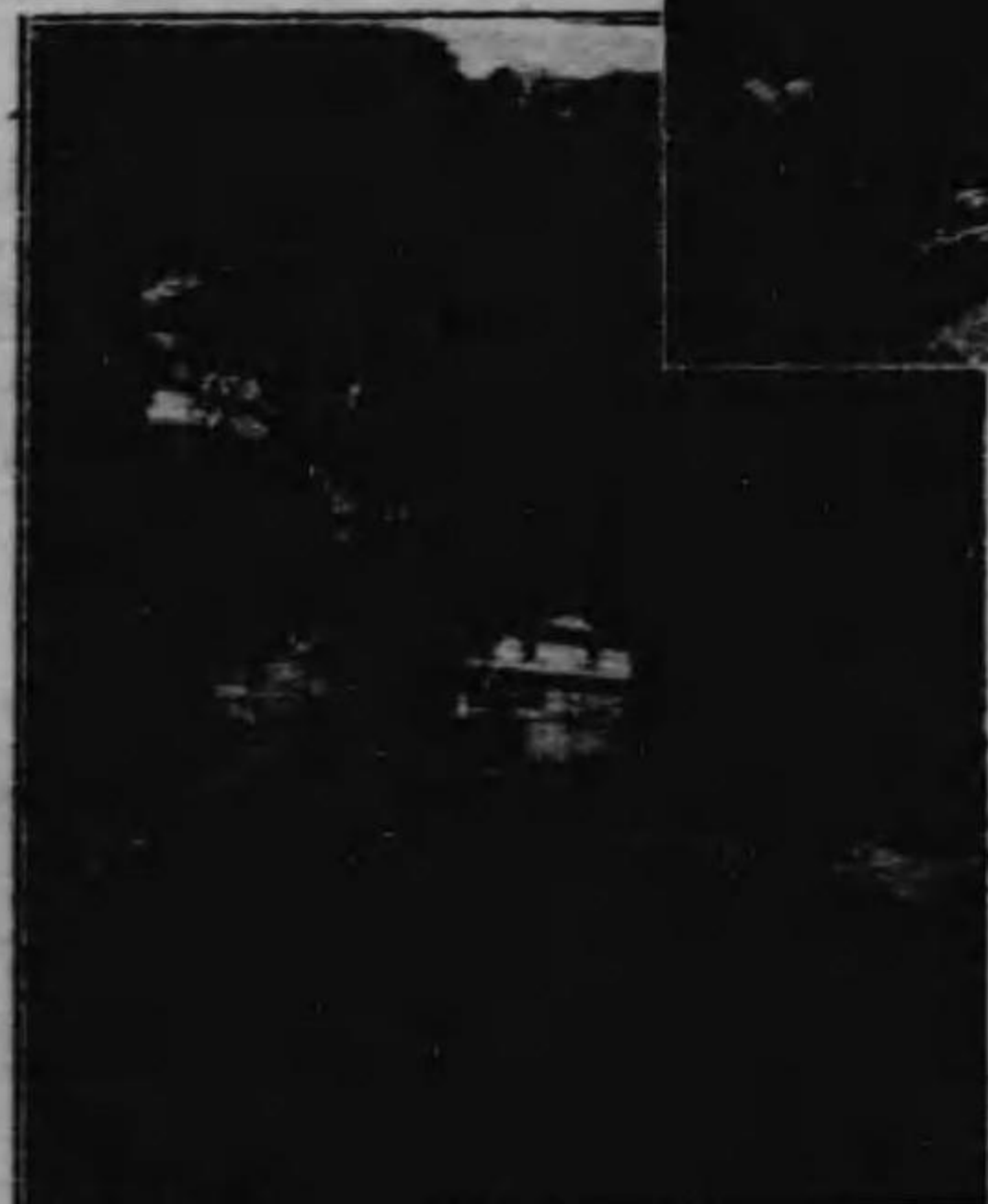
製材所の煙木場松崎晴に

○飛騨越中國境の茶屋に小憩

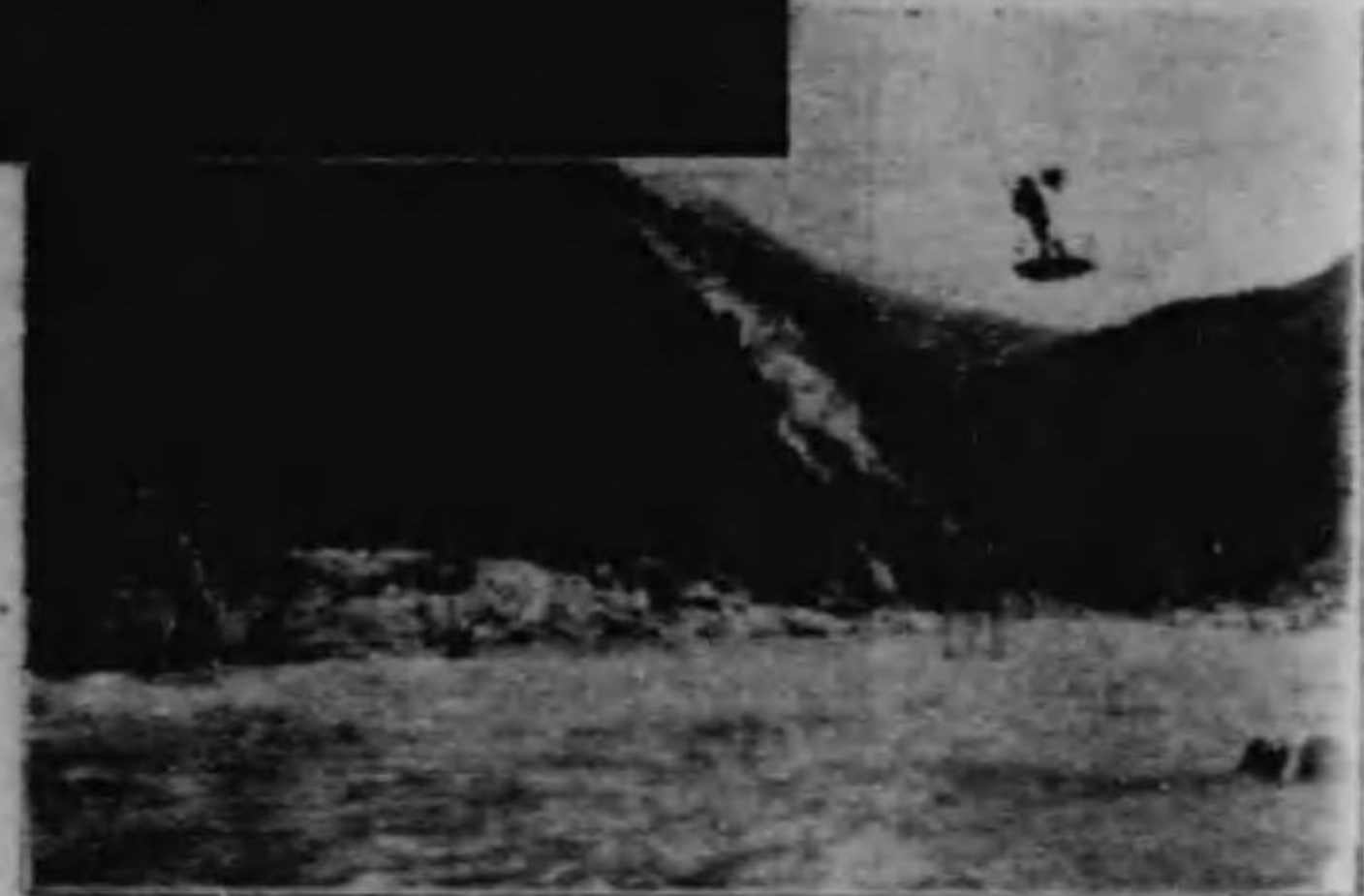
四顧を思ふ橋あれど雨にたゞ若葉



五ヶ山仙納原大橋



大牧温泉

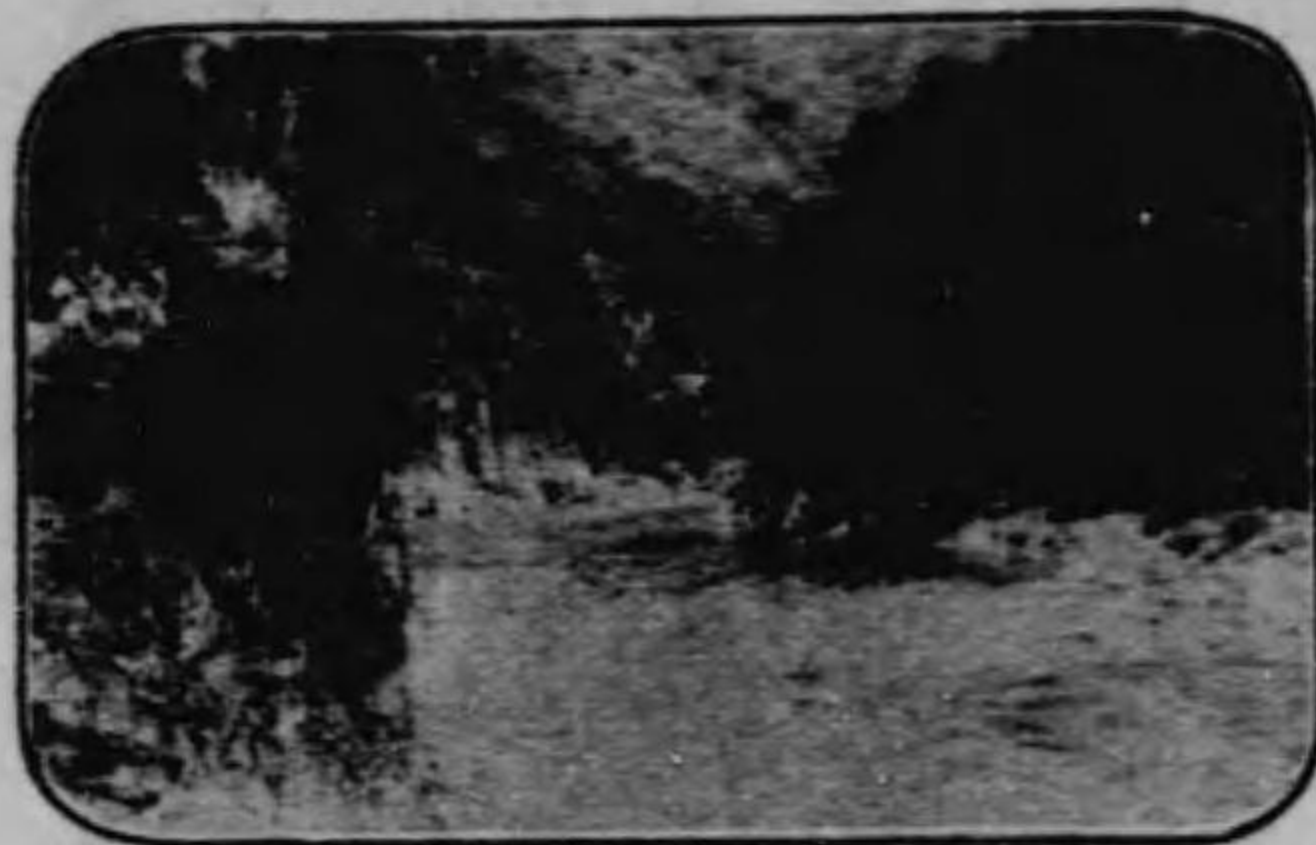


五ヶ山庄川籠ノ渡

井泉 水 氏

加賀藩、五箇山籠渡場を調査す、〔寶曆十四年二月書上帖〕

五ヶ山之内庄川筋籠渡場 但百姓自分掛渡置申候



五箇山中籠渡

- 一、籠渡 西ハ西赤尾町村領 東ハ猪村領
- 一、同 西ハ西赤尾町村領 東ハ新屋村領
- 一、同 西ハ染谷村領 東ハ田ノ下村領
- 一、同 西ハ染谷村領 東ハ菅沼村領
- 一、同 西ハ葎島村領 東ハ細島村領
- 但此籠場ハ冬中斗越渡仕候
- 一、同 西ハ皆葎村領 東ハ小原村領
- 一、同 西ハ皆葎村領 東ハ猪谷村領
- 一、同 西ハ上梨村領 東ハ猪谷村領
- 但此籠場春より秋迄作所通籠
- 一、同 西ハ上梨村領 東ハ田向村領
- 一、同 西ハ下梨村領 東ハ島村領
- 一、同 西ハ渡原村領 東ハ大崩島村領
- 一、同 西ハ城村領 東ハ祖山村領
- 一、同 西ハ下原村領 東ハ北原村領



五ヶ山景

五箇山の方言

ウンバ 母
 ベイサ 娘
 オンノ 祖父
 オバイ 弟の妻
 ハツコ 甥姪
 ゴシ 小供
 ガゴ 嬰子
 アヂチ 別家

十三箇所

ユダイ 夕食
 トネ 太薪
 テ 廣間
 オクンテ 座敷
 オマイ 木地盆
 メンジャ 流場
 コズバ 浴
 サハチ 摺鉢

チヤノコ 煎豆
 ナイ 地震
 オカイサ 旅人
 オシキ 膳
 ヘイヒキ 縁遠娘
 チウウダ 寢所
 チヨンド 鼠
 オバイサ 蛙
 フンベキ
 カイロ

ヨ ガ 蚊
 バ イ 蠅
 シラチヨゴ 悪戯
 ウヤナイ 体を濡すこと
 オゼル 足をふみ滑ること
 キヤツタ 来た
 キツラワ 来たろう
 イルンナ いろ／＼な
 アサマ あなた
 アイエイ 返 辭
 アイエイ 遠呼の合圖
 オーホホイ シは敬語の語尾
 イクマイカイシ 大便する
 クソヒル 途中大切に
 アイシヤンヤ

シチヨル して居る
 アシナカハク 懸値ないふ
 シホナメル 恥かく
 オチヤマイレ お茶おあがり
 ガンド 人をそしること
 マアイテ 振へて
 カンテ 撥ふこと
 ハバキヌキ 歸宅見舞
 ムシロシキ 後妻
 ホマセル 進上
 ホ ス 押す



大牧温泉



大牧温泉熊追瀧



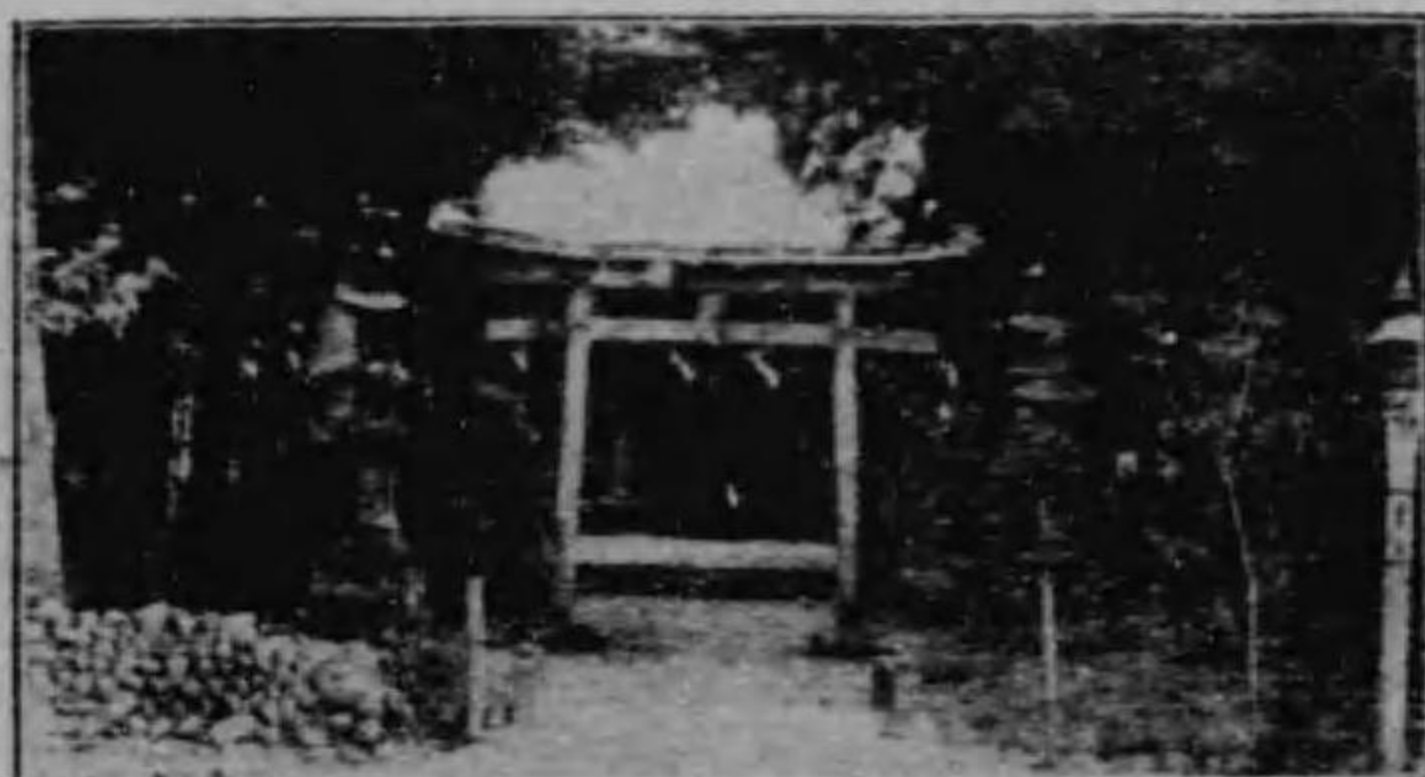
國幣申社に内定されたる
高瀬神社



福野市街



青島稻原種田



郷社中田移田八幡宮



庄川辨財天前



湯谷温泉



庄川中田橋

〔大牧温泉〕 福野町より磯波線の便を驅りて、終点なる青島に下車し、それより東方二里半の樵徑を辿りて行けば庄川の右岸利賀村の大牧村にある温泉に着く。本泉は天文年中の發見に係る鹽類泉にして消化器病、貧血症、婦人病等に効ありといふ。此地方丘壑の富を擅にし、林泉の奢を極め雄神（庄川）の清流怒號して響々たり。籠の渡し、芦鞍瀧、大湍、吊橋、撥不橋等の名所に共に浴客の心神を養ふ。

葉山葵を洗ふ清水豆腐石に見ゆ。
碓湯に下る連るる清水ありぬ方へ、

碧梧桐氏
同



湯谷温泉瀧布泉

〔湯谷温泉〕 大牧と同じく青島より東方半里にして湯谷温泉に着く、本泉は庄川の岩底より湧出するを以て沿岸に浴場を設く。僕麻質、消化器病、貧血症に特效あり。此地一帯の風色瀾するに足る、殊に仙納原溪湍の橋に佇み瀑々たる激流を開き湛々たる碧潭を俯瞰せば、そぞろ豪快なる感に打たる。

〔瑞泉寺〕 福野町の東南一里二十町餘、八乙女山麓井波町に在る大谷派別格



湯谷温泉泉

別院なり。元中七年本願寺第五世綽如上人、後小松天皇の勅許を得て建立せしものにして天皇の勅願所なり。(傳へ云ふ始めの亂を避け福波郡山斐郷杉谷に庵住す、其頃異域より書を送りしが、高僧名儒皆讀むこと能はず綽如上人博識の聞え高かりしを以て將軍義滿、上人を請ず、上人書を讀み了りて返書を認めらる。又宮中に於て無量壽經を講じ周圍上人の勅號を賜ふ上人寺を國中八乙女山の下に建てることを奏す) 戦國時代に於て福波郡の大牛を領し、嚴然城廓を構へ勢力強大にして文明して許され勅願所となり勸進の御裁可ありたり)



井波別院

法土寂たり斧の音に夏を今生きて 井泉水
 せしも慶長十八年井波に復版し又堂宇を再建したり、爾後寺運漸次盛大となり、寶曆五年火災に罹りしが后ち再建し、明治十二年復た火を失し烏有に歸せしも數年ならずして本堂のみ建造せり、本寺は元本願寺派なりしが、古國府勝興寺と競ひ、終に慶安三年大谷派に



湯谷温泉藥師堂

善徳寺と共に轉ず、境内六千五百餘坪、堂宇の宏壯なること多く其比を見ず本堂は明治十二年焼失後の建築にして前口二二間奥行二十六間あり、阿彌陀如來を安置す、大門は寶曆大災後の建立に係り前口十一間、奥行八間五尺、階上に彌陀釋迦阿難の三尊を奉置す、建築彫刻の巧妙見るべきものあり、式臺門は前竝二間二尺奥行二間にして勅願所たりしにより菊の御紋章を刻み稱して菊御門と曰ふ、寶曆年中の建造なり。なほ太子堂は明治四十四年十一月に起工式を擧げ大正七年十一月竣工を見遷座式を度修す、本伽藍は二重屋根にて前口十三間奥行十四間五尺にして上宮太子二歳の尊像を安置し毎年七月二十一日より二十八日まで開扉して太子の徳を讃ふ。本寺には太子繪傳八軸、勸進狀一通其他寶物多く藏す。勸進狀は綽如上人の筆にして明治三十三年内務省告示第五十八號を以て國寶に指定されたり。

「翁塚」 井波黒髮庵に在り、瑞泉寺十一世浪化上人芭蕉に師事し、蕉翁の逝くや其遺髪を埋め一基を築きて庵を結び給ふ。即ち黒髮庵翁塚是れなり。俳人の訪ふもの多し。その翁塚記を略し新築芭蕉翁之塚文を掲ぐ

ことしは芭蕉翁七回の忌年に當りて文月十二日魂祭折からの月かけもすこ敷木を
 もれて實の入る秋の音も萩の友すれにたへてかた／＼聞通しかたき夕なり爰に蘭
 若あり淨蓮社といひて淨土の一流を傳へ不斷念佛の道場也其所は人里に遠からず樹



井波黒髮庵翁塚

木少し隔てしかも俗をはなれりさあれば竹茂り水流れて清閑おのづから懐を得たり日頃風狂の輩往かよひて吟花嘯月の雅蕙おこたる事なしかれて此寺に翁の墳墓を築かむ事をいふや丈侍林紅子まめやかに志を抽て庵主と其基地をえらび手づから土石を運びて方三尺の一基を經營す中には義仲寺故翁の碑下の小石三片を收む我聞樹石みな其神ありましていはんや之はそのまたき塚の石なり何そ靈なからむしかれば翁の神いますがことしこれより已來此翁の流を慕む輩はかならず此塚の前にて風雅の至誠を求むべき者也

此塚なりて後その共の撰もとけつるに壬午の冬の頃土芳等か文のおまつれに故翁肉縁たる也寧法師の厚志によりて黒髪をおくれり速に墳墓をひらき敬謹てまた收む寧法師か文も淺からざるものなれば俱に石中の物となしつるのみしつらひは旅のやうなり魂まつり

元祿壬午之初冬

〔浪化上人〕 應眞院浪化上人は大谷派本願寺第十四世の門跡塚如上人(白話)の十五子、第十五世常如上人(養勳、龜嶺山人)第十六世一如上人(逐塊子 歸休亭、洋々)の弟にして瑞泉寺第十一世主たりし人にして別に應々山人、休々山人、自遣堂の數號あり。

浮華輕佻の風ありし元祿俳壇に於て、談林にかぶれず、模倣に陥らず、極めて眞摯なる態度を以て新しき一俳境を拓かれ、所謂蕉門十哲の人々よりも或は一段上位を占むる人にあらざるかとのことなり。

上人は在京の折、去來紹介して嵯峨落林舎にて蕉翁の門に入り、爾後會ふこと二度より多からず、されどよく蕉翁の眞精神を體得して、その妙趣を發揮されたり。元祿十六年十月九日年僅に三十二歳を以て遷化せられしかども吟玉幾百の名吟を殘されたり。

永き日や太鼓のうらの 帖の音 浪 化

豆腐こそなのられ山はほととぎす 同

麻からなふみなる脊戸の 月見設 同

茶の花や鶯の子の なきならひ 同

芭蕉翁追悼

かなしさやしぐれに流る墓の文字 同

夏斷せん 我れも 浪化の世そ戀し 句 佛

浪化忌や司晨樓建つる志 同

浪化には御無沙汰申す 師走旅 同

いさゝ鳴く 鶯塚の 浪化想ふ夜や 同

の句は上人の御墓ひの芳吟と拜せらる。

浪化上人の眞蹟を拜して

御筆の御年の程も涼しけれ

越友會同人數名と浪化上人の井
波に遊ばんとす。福野より徒歩

道端げんげ上人への昔より

碧梧桐

井泉水

瀨波嵐山の曲

次第春を心の友としてく。越路の旅に急がむ。か様に候者は。九州肥後の國五家ノ莊。平家が末裔にて候。我此程は北國に來り。芦のしの原安宅の松。爰かしの名所を一見仕りて候。又よき次でなれば。是より越中國瀨波の郡。五箇の山村に。我が同じ落人の山腰ぐらしを。おとよはばやと思ひ候。道行雪はるゝ立山風も長閑にて。く。おと高松の波までも。治まる道に戸さしせぬ。石動山をすぎむらや。緑野に見ゆる雄神川。清き水上たづねつゝ。遙々くれば瀨波なる。福野の市にぞ着きにける。く。神さぶる常磐堅盤の止林より。く。五百機千機棧の音。髪もみどりの乙女子の。胸にひゞきて血潮湧けば。赤き心を糸に燃り。深き情を織り込みし。福野編こそいとし子の。榮ある衣や妙ならむ。く。梵鐘や。西方精舎の花に暮れ。く。中空を。塙に急ぐむら鴉。なくれも法の聲添へて。讀佛乘の因縁を。こもりつつみて宿りして。數そふ夢の花枕。く。

「雄神川くれなゐにほふ乙女らし。あしつけさるさ懶にたゝすらし。これ家持卿の詠歌なり。冠りから衣。着つゝなれにし奈良の時代。したはしく候。や。あれに年老いたるおのこの候。いかに老人に尋ね申べきことの候。「此方のこゝにて候か。何事にて候ぞ」見申せば古松老櫻藤かつらの樹の本を清め。祠に向ひ禮をなし給ふ。不審にて候。「これは庄の靈神。辨財天にて候。又雄神社とも敬ひ申て候。「仰にて候へども。謡曲竹生島には。辨財天は女体にて。く。いとれんごろに繰返されて候。此方の雄神社こそ近頃不審の至りに候。「恐れ多き事を申され候ものかな。斯様のことを申し候はゞ御心にも違ひ。亦は神慮もはかり難く候。そもく此清流を越して尊き神のまします所を雄神村と稱して候。されば當社と御一体分身。萬民御庇護に候。「その靈験は候。「さん候是なる御手洗川を雄神川とも申し。流れも長く越中なかばを潤ほして候。またあれなる白き標の建ち候所は。種田村と呼び申全國の種籾を撰み出す神のしろじめしたる靈地にて候。御手洗や。清き心に澄む水の。く。すぐに頼まば人の世も。神ぞたゞすの道にして。其神徳もあらたなり。神に男女の隔あらし。曰ふは知らぬ人の言葉ぞかし。今こそ不審春の日の。光和ぐ七五三のうち。松も色添花ものごかなる。神のお庭にやすらはむ。く。

春前に雨あつて花の開くること早し。山外に山有つて山盡じ。青山碧水の間雲來去す。花笑ひ鳥うたふ。誰かいつしの春色。げに春は年々。比は彌生にまた花の咲ぞや。見れば壘の城趾や伽羅谷の。綠樹に櫻色添て。八重一重さく九重の花盛り。名に負ふ四方の景色かな。く。

春や昔の春ならぬ。武夫ともの夢のあと。松風川風吹きよせて。雲となれかし櫻花。雪と散れかし櫻花。春の隙ゆく駒の道。はや程もなう礪波嵐山夕榮えて。少年の笛に春惜む。少年の笛に暮れ惜む。瀨々のすさ浪しげければ。光輝き緑樹陰を沈めず。あれ御覽ぜよ旅の人。鯉魚が躍り深潭に潜りて候。松陰をたよりによする漁舟の引く網にすくはれてこそ。いかに夫なる舟に便船申さうなう。と聲に惜き夢さめて。まことや花の朝にして。金輪際まことの神々しく。黄鳥長閑に春を養ふ。福野あきの黎明ぼるぞ、芽出度けれ。く。

七・九・一五夜戯作

〔中田橋〕 庄川の下流中田町に架しある三百間余の長橋なり。此河中芦附と稱する水藻生ず、形木耳に似て軟に色深緑にして稍々黚黒を帯ぶ、酢に和して食すべし。其味淡白にして香氣あり塵勞晩餐の折卓上の珍品とするに足る。殊に壹千余年前大伴家持卿源俊賴朝臣の述懐あるに於てをや。

なかみ川くれなぬにほふをさめらし

家持

蘆附とると瀨にたすらし

雄神川れしろ高萱ふみしたき

俊頼

とる芦附もせなかつためとそ

奥深に巢鷹のなくや雄神川

正浪
風化

射水川むかしこひしき流れかな

ふちにやくまん瀨にやむすはん
いみつ川渚の洲島たちか
むかしこひしき音のみそなく

逸名

〔弓清水〕 中田町の東

十町般若野村常國村にあり、壽永二年源義仲此地に来るや軍士大に渴す、乃ち弓を以て地を穿ちしに、清水忽ち湧出し、將士爲に渴を醫することを得たりと云ふ、泉今尙存し周圍石を以て蔽む、大旱と雖も涸れず、灌漑の利

同隨從公卿塚

養谷耕地整理



淳良親王塚



弓ノ清水



あり、後人傍に一小祠を建て清水八幡と名け、碑を立て其額末を誌し尙義仲の拜戴せしといふ觀音を一字に納む。

碑文は美濃大夢の撰
せしものなれとも略す

〔梅檀野〕 梅檀野は一に般若野と稱し中田町の東南一帶の平野をい



五ヶ山天柱石



庄川藤橋



種田稻原種田



青島貯木場

ふ、壽永二年平盛後、越後寒原の險を塞がんとて甲兵五千を率ゐ、越中に入らんとす、木曾義仲之を覺り其將今井兼平をして遊撃せしめんとて茲に會戦し平軍大敗遂に盛俊加賀に走れり。天文十四年長尾爲景、宇佐美定行を首將として越中に侵入

し各地を略して此地に来る、神保長職、椎名康胤、江波五郎等相謀り坎弁を設け、試に兵八千を率ゐて爲景に薄り、伴りて潰走し遂に爲景を陥す神保の將江波但馬槍を以て爲景を殺せり、今賴成新村にある長尾塚と稱するもの其古墳なりと、塚の高さ六尺、反別二十六歩雜草叢生す、永祿六年爲景の子上杉謙信來りて松原小出の二城を屠り首を獲ること四千余級、進んで放生津城に逼り神保長職を亡し、北くるを追うて江波五郎等十六人を斬り其首を此地に梟して、父の仇を報すと云ふ。昔時は寒烟荒草に閉され、鬼哭嗷々たる曠原なりしも、今や鷄鳴に田野を耕し晚鐘に鋤を洗ふ良村と化し轉た今昔の感に堪へざらしむ。

〔増山城跡(龜山城)〕 梅檀野村増山村東十余町の處に桃井氏より神保氏、神保氏より中川氏の居城の址在り、山高きこと四十九丈余山頂に據りて構へしなり本丸は東西四十五間許南北二十二間許高さ二三間の土臺あり樓櫓の址なるべし二丸は東西十六間余南北三十九間余三四尺の石徑あり中に穴を穿てごも其何の用たるを知らず三丸は東西十八間南北三十二間許三面谷に臨み後は黒川野山に連る。三丸の外に二の宅地跡あり一は方三十間一は方五十間許蓋し重臣等の宅せし所か。風蕭々老松を渡れば遊子斷腸の憶ひあらむ。

〔千光寺〕 梅檀野村岸谷村にあり、始め三論宗なりしが後ち真言宗に改む、大寶二年法道の開基にして桓武天皇以來七代の勅願所なり、當時數十の堂坊堂を駢べ頗る宏壯を極めしが兵燹に罹りて衰頽せり。爾後天正七年豐臣秀吉諸堂を修補し、制令三箇條を書して下付す、尋て前田利長深く皈依し、其守山城に在りし時寺領を寄進せり、今の堂宇は天正二年利長の再建

せしものといふ。境内宏く諸堂完備し幽邃静寂稀有の淨域なり。

〔淳良親王御墳墓〕 御墓は般若村安川村の東方に在り、淳良親王は御花園天皇の皇子にして、應仁年間、細川山名の兩氏權を争ひ、京洛の地大に亂るるや、親王亂を此地に避け、供奉の諸臣九人亦止まる、爾後三年間地方の士民大に歸服せしが、龜山城主神保良衡之を快しとせず、文明三年五月潛に一族に命じて弑し奉る、供奉の諸臣亦之に死す。塚は方二間余にて、石を以て築き上に五輪塔を建つ、南に方りて親王を火葬し奉りし址今猶歴然として残り、古來相警めて侵するものなし。

〔公卿塚〕 淳良親王御墓に接し公卿塚あり、供奉の人を埋葬せし處なりと傳ふ。

淳良親王碑勢州太田士專之撰あれども畧す。

各種博覽會有功賞受領

登 録 商 標
銘 酒

詩 百 篇

釀造元 山田正年

電話十五番

御料理
御旅館

沼田清藏

電話六番

二



株式會社

中越銀行福野支店

電話六五番

三

綿織物製造販賣

東野尻野村島

河合庄作

綿織物製造販賣

野尻村野尻

齋藤仁一郎

御料理

御旅館

蟠龍閣

成瀬助太郎

電話二二二番

御料理

當久多樓

(布袋德太郎)

電話六十九番

六

福野座

座主 布袋德太郎

麻織物製造販賣

布

福野製布株式會社

七

和洋紙商 木公堂 安永松造 商店

各種織物製造販賣業 松山長一郎

東礪波郡柴田屋

營業科目 運輸、倉庫、米穀、肥料 委託賣買 金錢貸附、不動產有價證券

大丸商事株式會社

福野町 電話七十六番

東礪波郡野尻
綿織物絹綿交織物製造販賣
高橋慶一

電話五五番

酒銘
日本魂
釀造元
福富潤之助

二日町



株式會社

礪波銀行福野支店

電話五番

各種織物製造卸問屋業

福野町



株式會社

六合商會

電話五三番

營業種目

各種機械器具及附屬品
シヤフト ボールト ナツト
カップリンク メタル
革車製作販賣並ニ修繕
ルト 機械油塗料其他工業
用品ノ販賣



株式會社

中越鐵工所

電話一一一番

富山縣福野町

北陸名産

金玉サイダー

清涼水株式會社

富山縣福野町

一般貨物取扱並ニ倉庫業

通

取引店

中越線福野驛前

井

桂井運輸店

電話 二三四一〇番
振替貯金東京一三四一〇番

内外米穀精米雜穀肥料營業

一

中越物産株式會社

本店 福野町 取次電話 七六番
支店 金澤市高岡町 電話 一三二三番

綿織物製造販賣

三

梶井與四郎

福野町

綿織物製造販賣
絹綿織物

幸

柴田幸太郎

福野町

各種織物問屋

河合榮次郎

福野 電話二番

綿織物製造販賣

共立織物株式會社

福野 電話六一番

書籍雜貨

大正日日新聞
北陸タイムス

取次

福野上町

森田吉太郎

電話七〇番

綿織
其他交織

製造販賣

川岸篤太郎

福野町

絹毛綿
各種織
製造

司 淺井由太郎

福野町

綿織物製造

中村庄太郎

福野町

麻織物製造販賣

新山久太郎

富山縣福野町

綿織物絹綿交織製造販賣

中村重兵衛

福野町 電話四番

綿織耕類製造

梅木太助

野尻村柴田屋

綿織物製造

河合次平

東野尻村野村島

綿織物
絹綿交織

製造販賣

吉井一次

富山縣福野町

綿織物絹綿交織物製造販賣



北陸物産株式会社

福野町

電話五二番
電略(〇サン)又ハ(サ)

元金澤病院長 山崎幹先生
藥學博士 小野瓢郎先生
外十四先生合議推薦方劑

風拂婦人病 野尻五香湯

養生藥 忠丹

懷中藥 健壽圓

滋養壯 強壯

富山縣東礪波郡野尻村

發賣元

(安居寺往來)

中島貫榮堂藥房

振替口座大阪壹六四壹〇番

綿織物製造販賣

河邊久藏

東野尻村苗加

綿織物製造販賣

高木純三

東野尻野村島

日乃本醬油釀造元

正一上醬油株式會社

電話一〇五番

野尻五香

累代相傳靈藥

頭痛、神經痛
 リウマチ、
 婦人血の道
 産前、産後
 疝氣、寸白、
 四季の感冒、
 中暑、腫物、
 等の良劑



野尻五香湯本
 鶴居養壽圓舖
 富山縣東礪波郡野尻村
 五香屋

振替(大阪)〇八九八番
 口座(大連)參九四番

鶴居養壽圓

滋養強壯補血
 の精力増進劑



からだをつよ
 くするねりや

株式会社神澤銀行福野支店

電話 五一 番

建築、受負、製材業

福野木材株式会社

電話 一〇九 番

綿織物製造販賣



北越織物株式會社

富山縣野尻村川除新

繩蒔吸及藁細工一切ノ製造賣買
並ニ器械ノ貸付之レカ生産品ノ買入

中越繩蒔株式會社

富山縣福野町

名物 千代ノ梅
カステイラ

和菓子調進所

森田風光堂

富山縣福野町



製紙原料
銑物空瓶
屑物空瓶
鎖衛かんぎく油

商

廣野芳太郎

富山縣福野町

三〇

綿織物各種製造元

上保米太郎

富山縣福野町

歐米最新式
高等洋裝一式
各國羅紗販賣



伊藤洋服店

福野上町通
電話四十三番

九



株式會社 株式會社

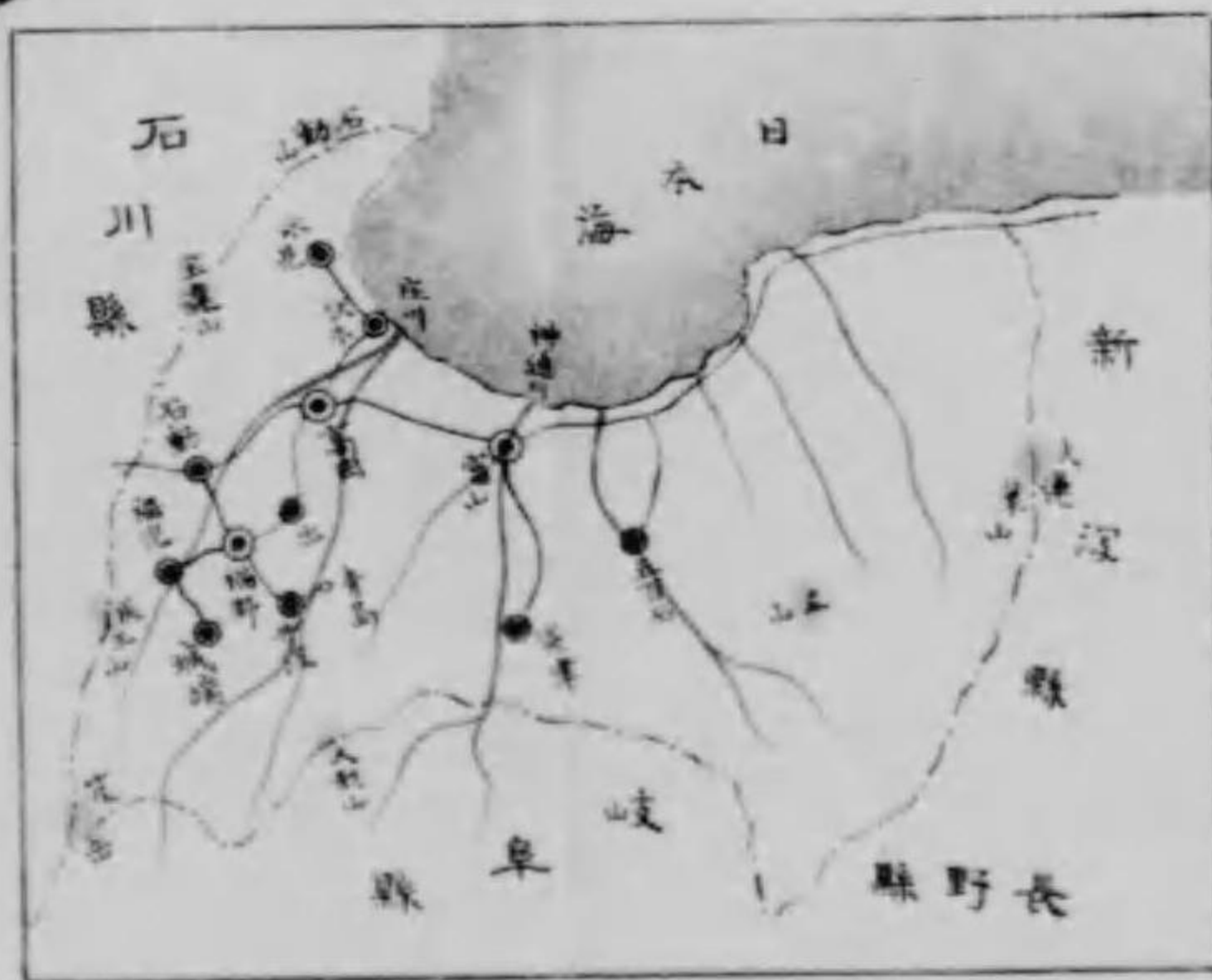
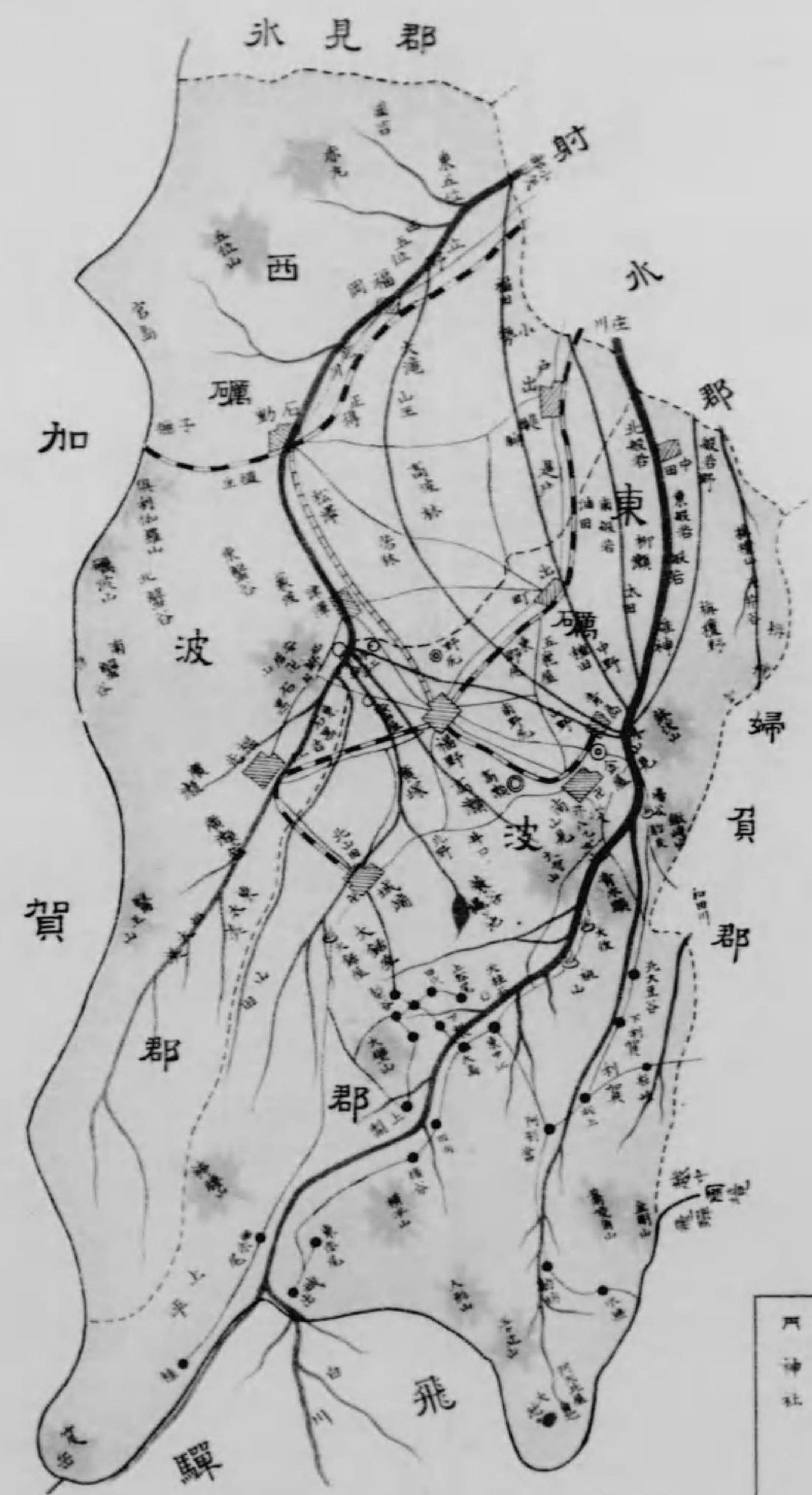
北陸商業銀行

北陸貯金銀行

福野町 電話五〇番

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15

福野町市街圖



川	●	◎	●	▲	★	
河	神	銀	商	機	組	道
流	社	行	店	務	合	
	院		會	會		
			社	社		
			理			
			事			

吾等微力にして
事に堪へず
去れど人類共同の目的を
果さんとて
百世に及ぶ事業の爲めに
潔直なる努力もて
相協戮して勵むとき

吾等に強き力あり

——ズイ・トヘリアス——

大正八年十二月二十三日印刷
大正八年十二月三十日發行

【非賣品】

富山縣東礪波郡福野町福野一、五八二番地

編纂者 布袋善吉

富山縣東礪波郡福野町福野一、八三二番地

發行所 福野織物同業組合

石川縣金澤市高岡町九十番地

印刷人 澤田助太郎

石川縣金澤市高岡町九十番地

印刷所 明治印刷株式會社



綿織物絹綿文織物製造販賣

申越中織物株式會社

富山縣福野町(電話一八番)

綿絲綿布製造販賣

共
共同綿絲株式會社

販賣部 福野町福野〔電話二五番〕
製造部 福野町二日町〔電話一〇六番〕

373
437

終